

fig.22-II-13.  
S B 06平面図



fig.22-II-14.  
S B 06



fig.22-II-15.  
S B 06  
カマドと煙道

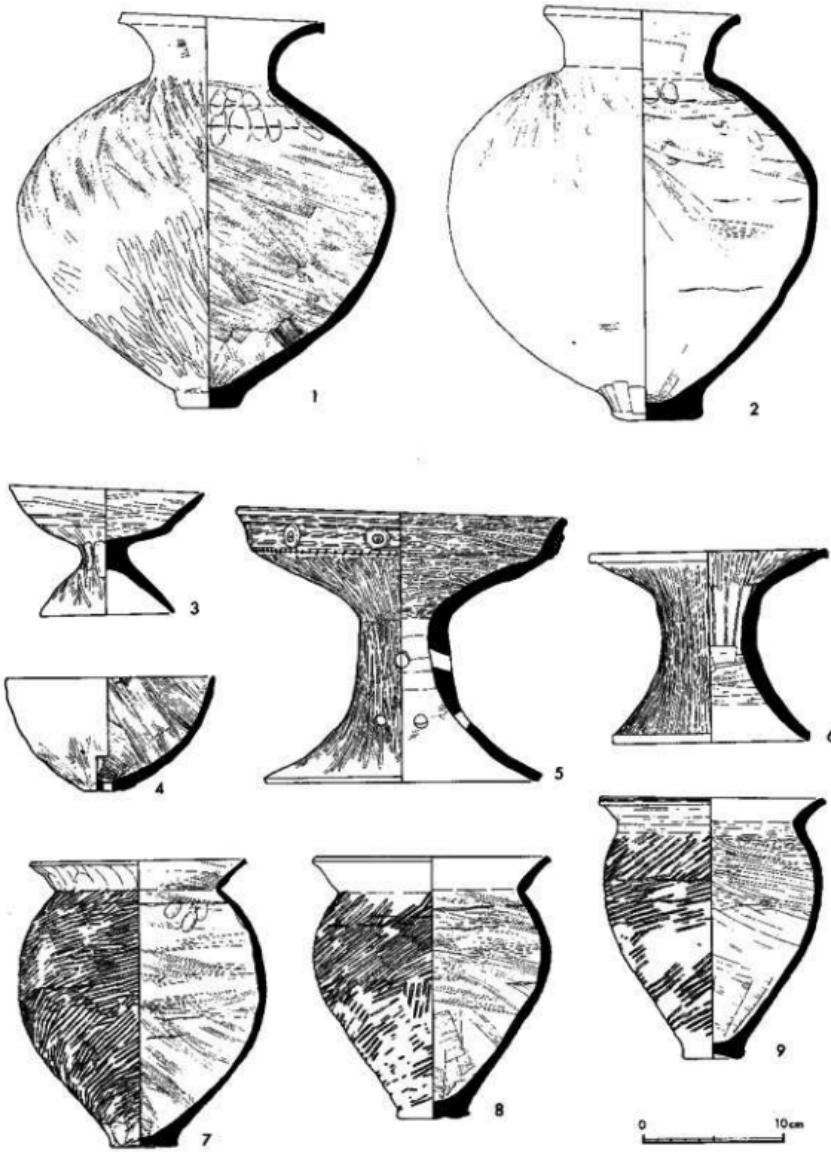


fig.22-II-16. 造物実測図(弥生時代後期)

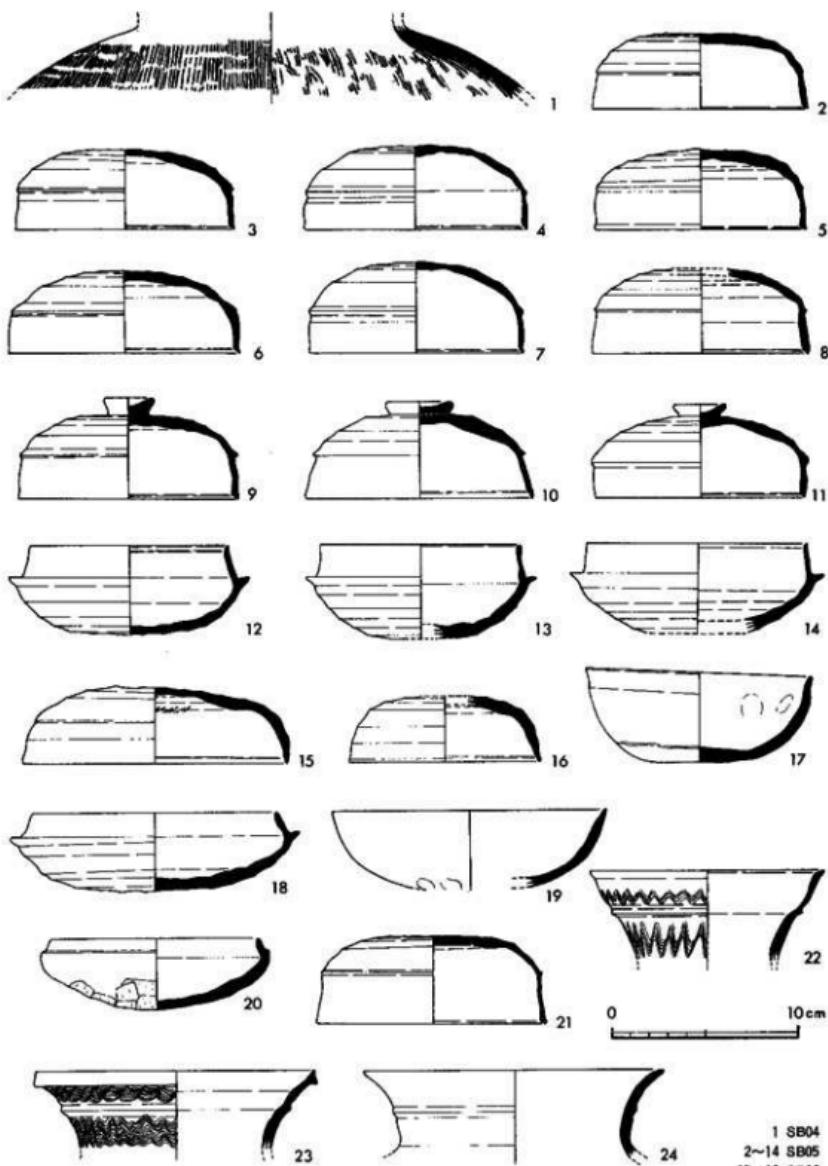


fig.22-II-17. 遺物実測図(古墳時代後期)

鎌倉時代

掘立柱建物（S B01～03）3棟と、流路1がこの時期に属する。

S B01は2間×2間以上、S B02は5間×1間以上、S B03は4間×1間以上で、全て縦柱であるが、全体の規模を知り得るものはない。

S B02・03は建て替えと考えられるが、その前後関係は不明である。柱穴からは、須恵器・瓦器が出土しているが、柱を建てる前に入れたものと、柱を抜いた後に入れたものが見られる。また、柱穴掘形の底に川原石を置き基礎としたものもみられる。

なお、北に接する城の前地区第4次調査では、平安時代後期に属する掘立柱建物を検出しているが、当調査地区内には存在しなかった。

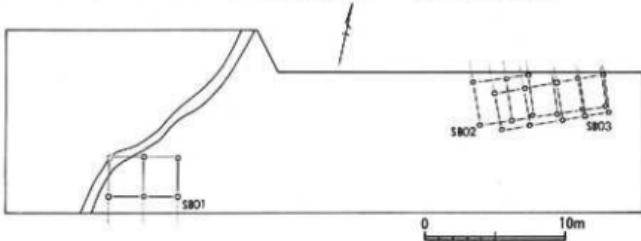


fig.22-II-18.  
鎌倉時代の造構



fig.22-II-19. S B01・溝状造構

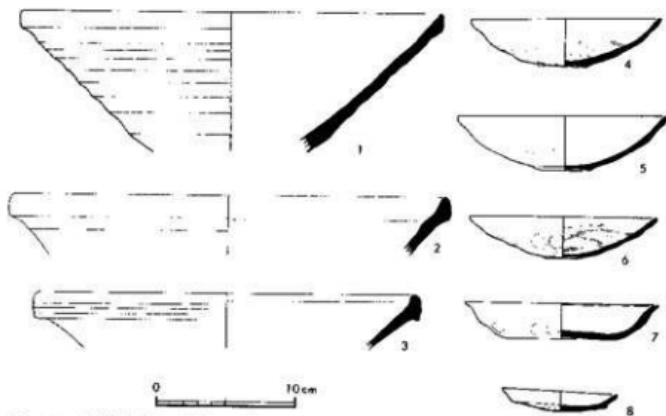


fig.22-II-20. 遺物実測図（鎌倉時代）

## 2.まとめ

今回の調査で特に注目されるのは、弥生時代後期の集石墓（S X01）と、古墳時代後期の竪穴住居に設けられたカマドの「L」字型煙道である。

集石墓は、これまで広島県下などで知られていたが、当地域では全くその例は知られていない。今回の例も底面から木棺の木口穴が検出されなければ、墓址とは判断できなかつたであろう。したがつて、土坑中に砾石や土器が多く入れられている遺構については、墓址である可能性を考えながら調査する必要があつる。

なお、S X01出土の多量の砾石はその大部分が当該地の遺構面に含まれている花崗岩砾で、他から運ばれてきたのは若干の河原石のみである。土器は、壺・甕形土器が大部分を占め、鉢・高杯・器台形土器はごくわずかに含まれていた程度である。後期後半に属するものである。

L字型の煙道を設ける住居の例は、城の前地区第23次調査でも知られている。しかし、この煙道は住居内をL字型に走るもので（いま仮に「郡家型住居A」とする）今回検出されたものは（同じく「郡家型住居B」とする）、その発展形態と考えられる。この様な形態のカマド及び煙道を有する住居の性格については、今にわかつには明らかにしがたいが、類例のある綾部市周辺や和泉式部遺跡は渡米人ととの関連が濃厚な地域で、渡来系氏族との関係が考えられる。

### III. 城の前地区第25次調査

1. 調査の概要　調査区北東部で検出された不整方形の堅穴住居状遺構で、南北4.3m、東西4.4m・深さ5~45cmを測る。

SB01　床面で3つのピットを検出しているが、支柱穴は不明である。周壁溝及びその他の付属施設は確認されなかった。

覆土内より、6世紀末~7世紀初頭の須恵器、土師器が出土している。

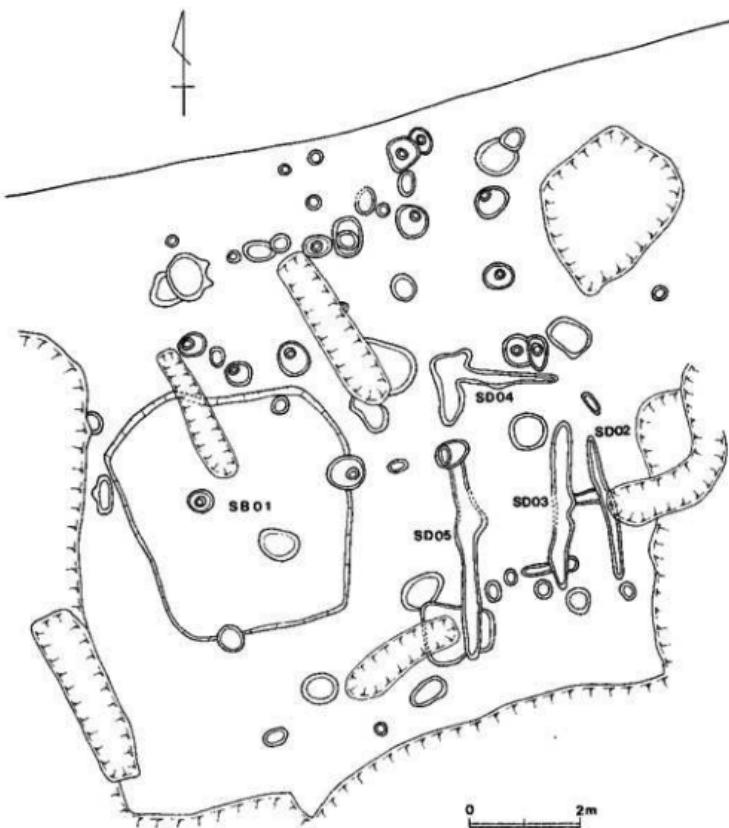


fig. 22-III-1. 調査区北東部平面図



Fig. 22-III-2.  
調査区北東部全景

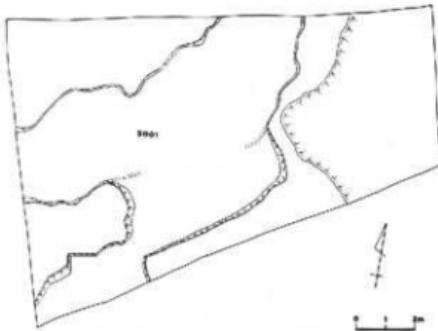


Fig. 22-III-3.  
調査区南西部平面図



Fig. 22-III-4. SD 01

- S D01 調査区南西部で検出された東西方向にのびる溝状遺構である。幅2.5m～4.0m・深さ0.4m～0.6mを測る。南側は一部攪乱により、切られている。堆積土内より、古墳時代後期～平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器・黒色土器・土錘等が出土している。
- S D02 調査区北東部で検出された南北方向にのびる溝状遺構で、全長2.6m・幅25cm・深さ15cmを測る。埋土内より、古墳時代後期の須恵器・土師器が出土している。
- S D03 S D02の西方30cmで検出された南北方向にのびる溝状遺構で、全長3.0m・幅35cm・深さ10cmを測る。埋土内より、古墳時代後期頃～奈良時代の須恵器・土師器が出土している。
- S D04 S D03の北西方1.0mで検出されたL字形を呈する溝状遺構で、南北1.4m・東西2.3m・幅15cm～45cm・深さ5cm～20cmを測る。埋土内より、古墳時代後期の須恵器・土師器が出土している。
- S D05 S D04の南方30cmで検出された溝状遺構で、全長3.5m・幅30cm～60cm・深さ10cmを測る。埋土内より、須恵器・土師器が出土しているが、時期は不明である。
- S X01 調査区西側で検出された不整形の土坑で、長径3.0m・短径0.6m・20cm～40cmを測る。埋土内より、土師器が出土しているが、時期は不明である。
- S X02 S X01のすぐ北方で検出された不整形の土坑で、長径1.7m・短径0.5m・深さ10cm～15cmを測る。遺物は出土しなかった。
- S K01 S X01の北方1.5mで検出された精円形の土坑で、長径1.0m・短径0.5m以上・深さ20cmを測る。西側は攪乱により切られている。埋土内より、古墳時代頃の土師器が出土している。
- 2.まとめ 今回の調査では、古墳時代後期から平安時代にかけての集落址の一部が検出された。なかでも、奈良時代の遺物が出土したことは、当遺跡の性格を考える上において、非常に重要であると考えられる。

#### IV. 城の前地区第26次調査

**1. 調査の概要** 昭和61年度に実施された城の前地区第23次調査区の南隣に位置しており、第23次調査で検出されたS B02～S B04の竪穴住居の南半分を検出した。

**S B02** 隅丸長方形の竪穴住居である。今回の調査では、住居の南半分を検出しており、前年度調査成果とあわせて検討すると、住居の規模は、南北4.6m・東西5.3m・深さ0.3mを測る。主柱穴は、4本であり、北側を除く各辺に、幅20cm～30cm・深さ10cmを測る周壁溝がめぐっている。また、北壁中央でカマドが検出された。カマドは、焚口の内法25cm・奥行き1.1mを測り、焚口内部には、土器底部を支えるための石が埋めこまれていた。支脚となる石より焚口側は、底面、壁面とも火熱により赤変していた。煙道は、一般的には、造り付けられた壁面から、垂直に住居の外方へと延びているが、この場合は、壁面に平行に延びており、北東隅へと至る。煙道の内法は、20cm～30cm・全長2.1mを測る。

遺物は、床面直上及び埋土より、5世紀末～6世紀初頭頃の須恵器坏・高坏・甕・壺・土器器高坏・甕等が出土しており、床面の一部で炭化材が検出されている。

S B02の南東隅で、長径90cm・短径70cm・深さ10cmの土坑（S K01）が検出された。



fig. 22-IV-1. 調査区平面図



fig.22-N-2.  
S B02

S B03

S B03は、隅丸長方形の竪穴住居である。S B02同様、住居の南半分を検出しており、全体の規模は、南北3.0m・東西5.5m・深さ0.2mを測る。床面でピットを1ヵ所検出したが、主柱穴は不明である。周壁溝は検出されなかった。また、北壁中央よりやや東寄りで、カマドが検出された。S B02と同様の形態をしており、焚口の内法45cm・奥行き65cmを測る。焚口より40cm北側の中央付近に土器底部を支えるための石が埋め込まれていた。煙道も、北壁に平行して延びており、北東隅へと至る。煙道の内法は、10cm~15cmで、全長80cmを測る。一方、床面直上及び埋土内より、5世紀末~6世紀初頭頃の須恵器・土師器が出土している。

S B04

隅丸方形の竪穴住居である。今回の調査では、住居の南半分を検出しており、全体の規模は、南北4.6m・東西4.7m・深さ0.1m~0.15mを測る。

床面の3ヵ所において、柱穴を検出しておらず、おそらく4主柱穴であると考えられる。周壁溝は、西壁北側において検出された。また、カマドは検出されなかった。

床面直上及び埋土内より、5世紀末~6世紀初頭頃の須恵器壊・甕、土師器壊等が出土している。

なお、住居の切り合い関係から、S B04→S B03→S B02の順に新しくなっている。

河道

調査区東端から約9mの範囲において、河道が検出された。河道は、東に向かって次第に深くなってしまい、調査区東端での深さは、約1.5mを測る。河道堆積土（淡茶灰色粗砂）内より、弥生時代後期頃の土器が出土している。その他、古墳時代後期頃のピットを数ヵ所検出したが、建物としてまとまるような配列は見られなかった。

遺物は、弥生時代後期頃の壺・甕・高壺等が出土している。

## V. 城の前地区第27次調査

## 1. 調査の概要

昭和61年度に実施された城の前地区第23次調査区の北隣に位置しており、第23次調査区で検出されたS B 07の北半部をはじめ、鎌倉時代～室町時代の土坑であるS X 02や、弥生時代後期頃の遺物を含む河道の他、古墳時代後期頃のピットが數ヶ所検出された。

S B 07

今回の調査では、南北2間×東西2間分を検出したが、第23次調査の成果と合わせて検討すると、南北8.1m・東西4.2mを測る4間×2間の掘立柱建物である。柱穴内からの出土遺物がないため、時期は確定し難いが、おそらく鎌倉時代～室町時代にかけてのものと考えられる。

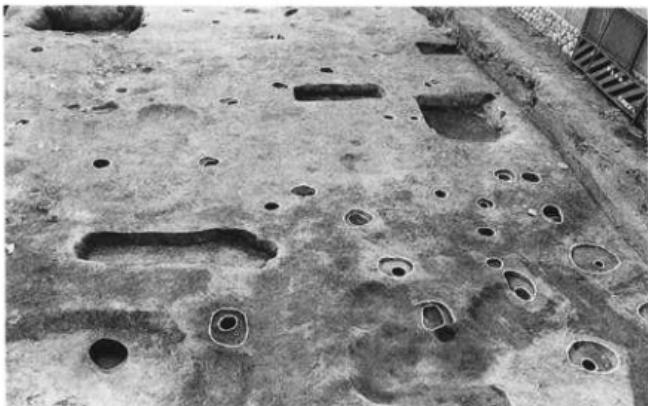


fig.22-V-1.  
溝査区全景



fig.22-V-2. S B 07



fig.22-V-3. 河道内土器出土状況

S X02

南北2.3m・東西2.1m以上・深さ0.6mを測る楕円形の土坑である。埋土内より、弥生時代後期の壺の破片等が出土しているが、鎌倉時代～室町時代にかけてのものである可能性が高い。

河道

調査区北東隅において河道が検出された。東西4.6m・南北5.2mの範囲で、淡茶灰色粗砂が堆積しており、東に向かって次第に深くなっている。調査区北東隅での深さは、約1.8mを測る。

河道堆積土内より、弥生時代後期頃の壺・甕・高坏等が出土している。

その他、古墳時代後期頃のピットを数ヵ所検出したが、建物としてまとまるような配列は見られなかった。



fig.22-V-4.  
S X02



fig.22-V-5.  
河道

## 2.まとめ

今回の調査によって、古墳時代後期の集落の一部が検出されたが、近隣地の城の前地区及び地蔵元地区において、同時期の竪穴住居をはじめ、溝・土坑・ピット等が検出しておらず、さらに周辺地域において、同時期の遺構が発見される可能性が高い。

## VI. 大蔵地区第2次調査

## 1. 調査の概要

調査地は、大蔵地区第1次調査の西南に接する。北から南へかなりの傾斜を持ち、北側三分の一の遺構面はかなり削平されていた。

遺構は、下記のように大別して3時期存在した。

## 中世

最上層は、鎌倉時代の遺物を出土する水田層の存在及び、溝状遺構（S D01）、ピット等である。

S D01は、幅0.4~0.6m・深さ0.1~0.2mで「コ」の字形を呈していたと考えられる。ピットは、0.2~0.4mで柱穴と考えられるが、まとまりを確



fig. 22-VI-1.  
上層遺構平面図

認することはできなかった。出土遺物は、須恵器、土師器、瓦器、磁器等で、12~14世紀代のものである。

**古代** 当地区で最も中心となるべき時代である。流路の埋没した粗砂上に掘立柱建物2棟(SB01・02)、そしておそらく掘立柱建物になると予想される柱穴群が1ヶ所存在する。また、土坑も4基検出した。

SB01は、2間×3間以上(3.65×4.95m)で建物主軸はほぼ北をさす。柱穴掘形は、短辺0.5~0.6×0.9~1.1mの長方形で、深さ0.2~0.4mである。柱穴は、径0.25~0.35mであるが、本来はもっと深かったと考えられる。

SB02もSB01と同規模の柱穴および掘形を有するが、1間×3間と変則的で、一般的な建物ではない。

また、柱穴群からは建物としてのまとまりを見つけ出せないが、何らかの建築物があったことは確かである。

これらの時期の確定は困難であるが、這構面から出土する遺物とも合わせ考えると、9~10世紀頃と推定される。

土坑は、調査区南端で集中して4基検出している。いずれの土坑も不定形な平面形で、深さは0.2~0.4mである。いずれからも土器は出土しているが、SK01で壊がまとまって出土している。また、SK04出土の土師器壊は、緻密な胎土で暗紋を施している。畿内中心部からの搬入品と考えられる。

これらの土器から、先の掘立柱建物と同時期に属すると考えられる。

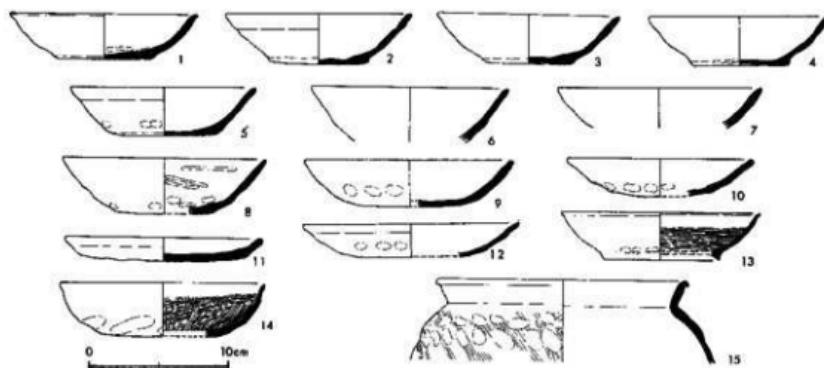


fig. 22-VI-2. 遺物実測図



fig.22-VI-3.  
上層全景



fig.22-VI-4.  
S B01

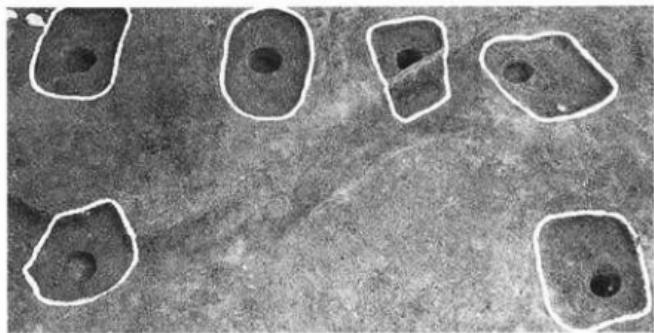


fig.22-VI-5.  
S B02

## 弥生

弥生時代の遺構面は、建物基礎が到達する部分のみに限って部分的にトレンチで確認するに止まった。それによると、北から南へ流れる自然流路が存在するのみであった。この流路の西岸は確認できるが、東岸は調査対象地区外で確認出来なかつた。この流路内には弥生土器が数多く埋没していた。最も下の層は0.5~0.3mの粘土層で、細片化した弥生土器が含まれている。それ以上の層は、粗砂の堆積で、その中には原形を保つものやそれに近い状態の弥生土器が点々と並んで出土した。流路底の細片は、周辺からの流入によるものと考えられるが、粗砂層中の土器は、人為的に置き並べられたと考えられる。しかし、その意味については明らかではない。

これらの弥生土器は、すべて後期中頃のものである。

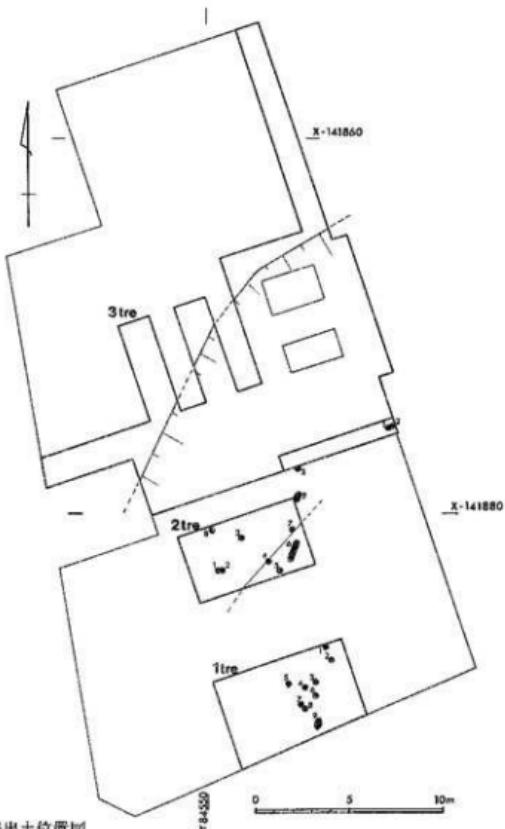


fig.22-VI-6.  
下層トレンチ及び弥生土器出土位置図



fig.22-VI-7.  
下層全景



fig.22-VI-8.  
下層1トレンチ  
土器出土狀況

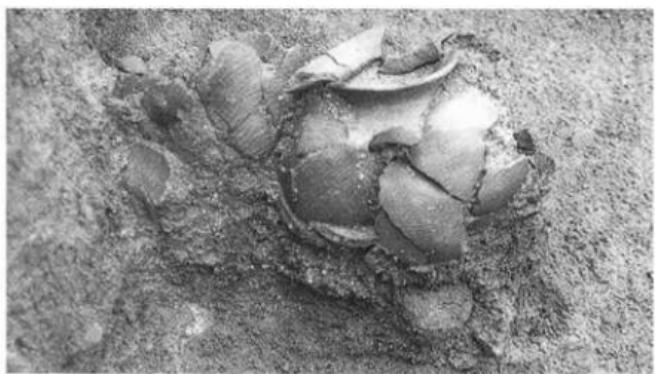


fig.22-VI-9.  
下層3トレンチ  
土器出土狀況

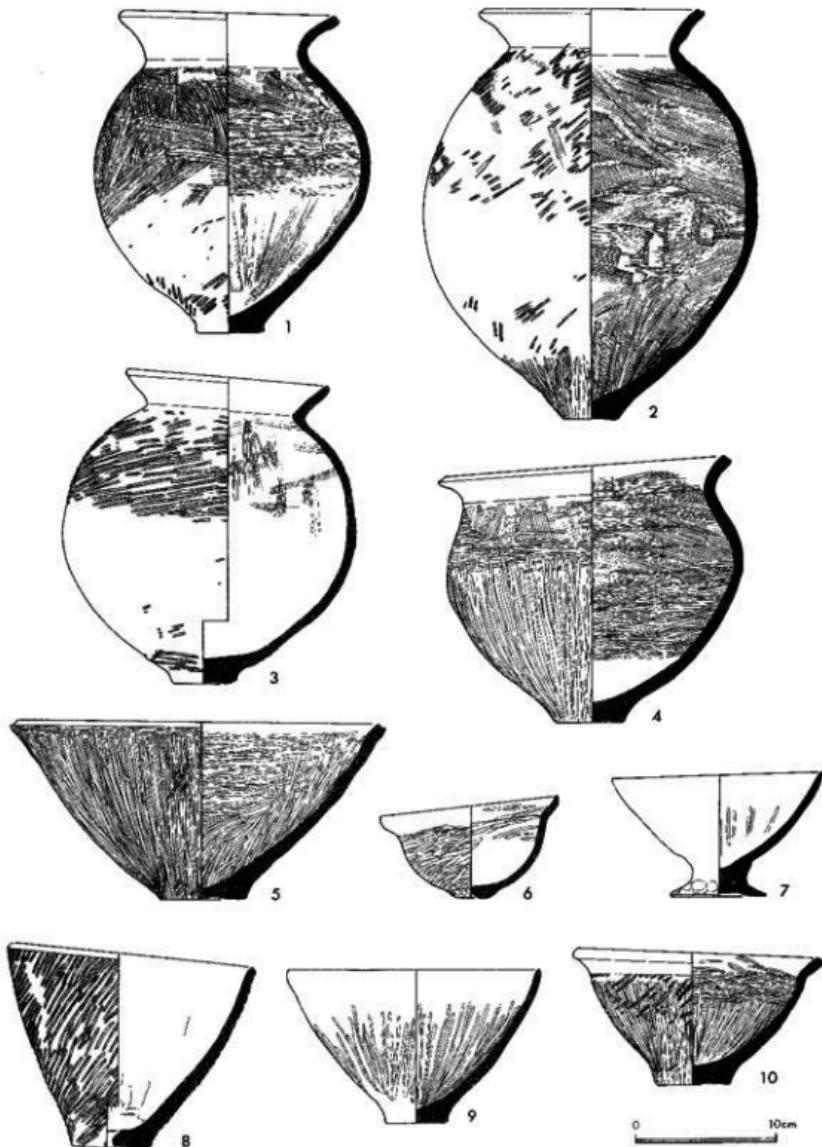


fig.22—VI-10. 下层造物实测图①

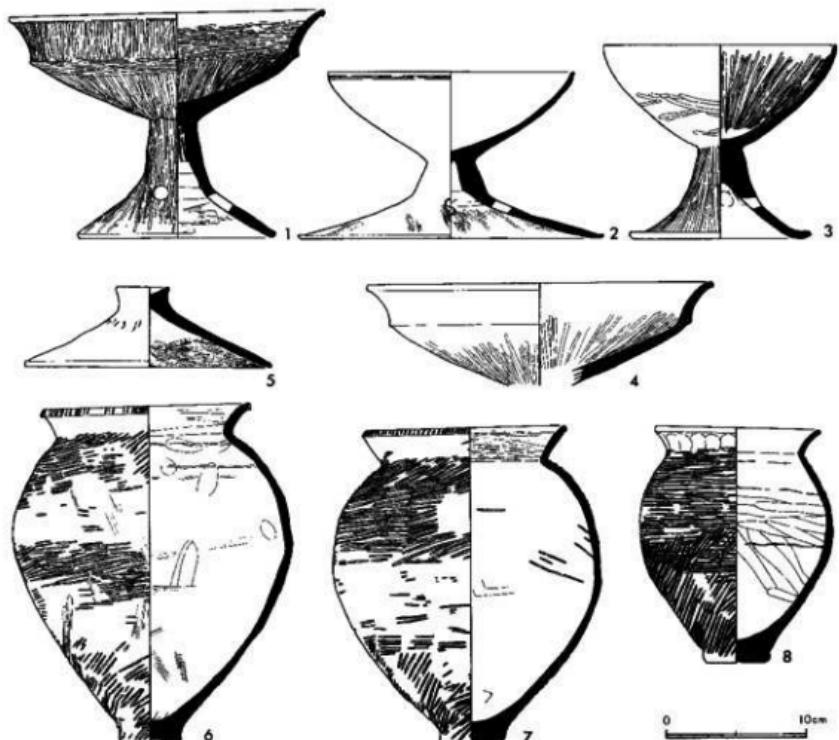


fig.22-VI-11. 下層遺物実測図②

## 2.まとめ

調査前に予想された遺構が検出され、郡衙遺跡である可能性が高くなつた。つまり、S B01は第1次調査で検出された掘立柱建物と方位や柱穴規模を同じくし、奈良時代～平安時代にはこの付近一帯に規則制のある建物群が存在していたことが明らかになつた点である。今後も周辺で開発計画が予定されていることから、近い将来、建物群の配置及びその規模が明らかになるであろう。

弥生時代の遺物の出土状況は、第1次調査時の出土状況と同様であることから、同一流路内と考えられる。また、今日まで当遺跡大蔵地区内では住居跡は確認されていなかったが、当調査区の西に接する第3次調査で初めて検出された。この住居跡は、流路内に土器を置き並べた人々と密接な関連を有すると考えられる。

## VII. 大藏地区第3次調査

### 1. 調査の概要

マンション基礎部分14ヵ所について、当初発掘調査を実施する予定あったが、北側の5ヵ所については旧構造物の基礎や地下室などによってすでに大きく搅乱を受けており、南側の9ヵ所についてのみ発掘調査を実施した。しかし、その9ヵ所も何らかの搅乱を受けているものが多く、遺構の確認が困難なものもあった。

遺構面は、第1～第6トレーナー・第9トレーナーにおいて2面確認された。第1遺構面は平安時代以降で、第2遺構面は弥生時代から古墳時代のものである。

#### 第1トレーナー

遺構面まで搅乱を受け、北側半分については遺構を全く確認することはできなかった。南側で柱穴・ピットを検出した。S P01・02は弥生時代の遺物包含層を切り込む柱穴で、1辺50cmほどの隅丸方形の握形を持つものである。遺物は出土していないが、平安時代頃のものと考えられる。

#### 第2トレーナー

遺構面は、2面確認されている。第1遺構面は、中央部に大きく搅乱を受けていたが、土坑、溝などを確認することができた。第2遺構面では、ピット1ヵ所を確認できたのみである。第1遺構面は古墳時代以降の遺物を含み、第2遺構面は弥生時代のものであると思われる。

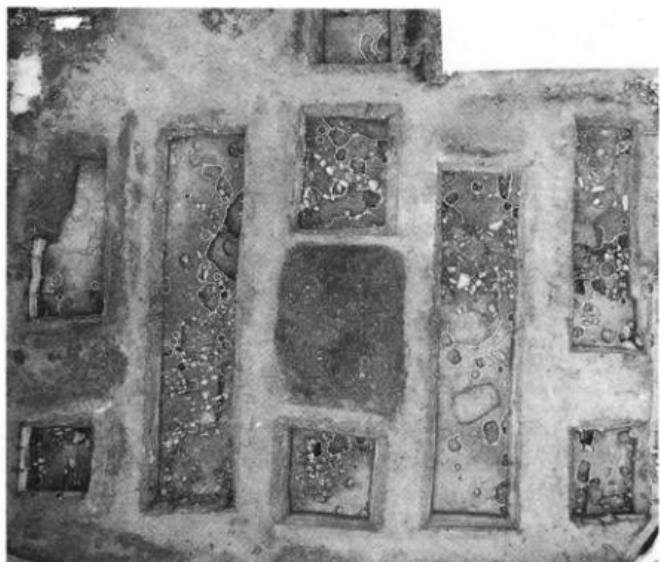


fig.22-1.  
調査地全景

第3トレンチ 造構面は、2面確認されている。第1造構面は、平安時代頃と考えられる柱穴群とピットが検出されたが、建物の構成については明確にすることはできなかった。第2造構面では、弥生時代後期後半と考えられる土坑、ピットなどを検出することができた。

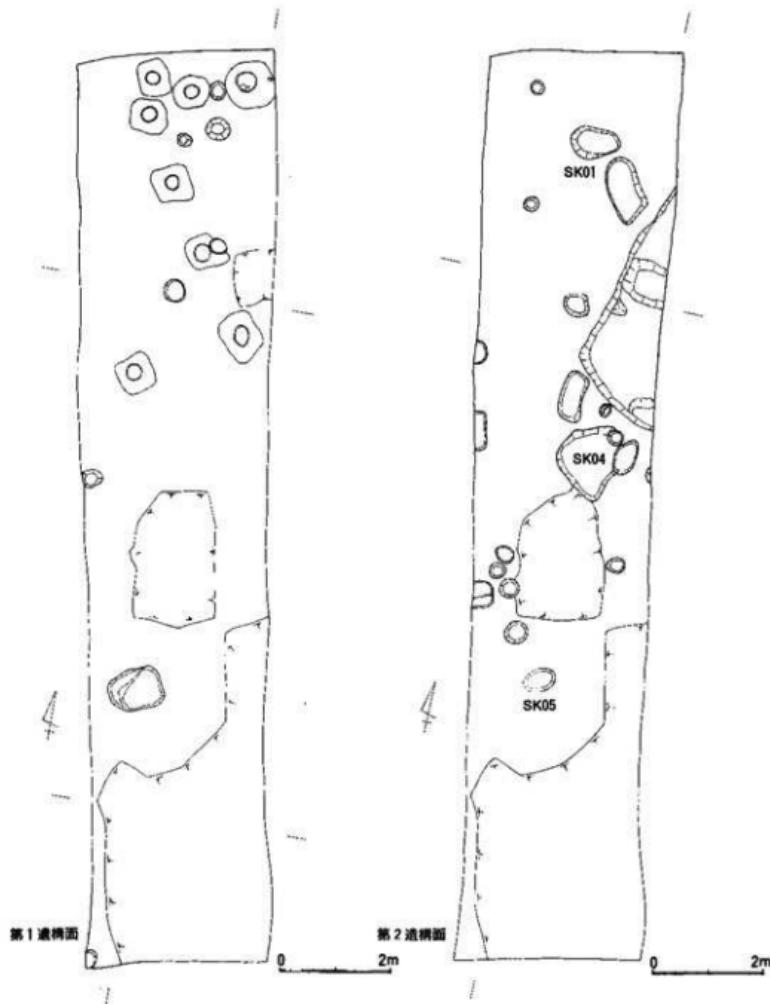


fig.22-VI-2. 第3トレンチ平面図



fig.22-VI-3. 第3トレンチ第1遺構面



fig.22-VI-4. 第3トレンチ第2遺構面

**第4トレンチ** 地下室に南接していたため、擾乱を大きく受けているが、遺構面は2面確認することができた。第1遺構面は平安時代頃の柱穴と、それに切られる竪穴住居と考えられる方形の落ち込みを検出している。これに対応する落ち込みが、第5トレンチにおいても検出されていることからも、その可能性は高いものと判断される。復元すれば、1辺約4.5mの方形のものとなるが、柱穴や周壁溝などは確認されなかった。第2遺構面においては、土坑1基と船底状の土坑を1基検出した。これらの土坑は、竪穴住居の中央土坑とそれに付随する土坑に酷似し、これに対応するかのように弧を描く落ち込みが、第5トレンチで確認されていることから、竪穴住居に伴う土坑である可能性が高いものと判断される。復元すれば、直径9m以上の円形のものとなる。これについても、柱穴や周壁溝などは確認されなかった。出土遺物から弥生時代後期のものと考えられる。

**第5トレンチ** 遺構面は、2面確認されている。第1遺構面は土坑と第4トレンチに続く竪穴住居、第2遺構面ではピットなどと第3トレンチに続く不定形の落ち込み、第4トレンチに続く竪穴住居である。この竪穴住居と考えられる落ち込みからは、完形に近い甕が出土している。

**第6トレンチ** 遺構面は2面確認され、柱穴・ピット・土坑が検出されたが、建物やその性格については明確にすることはできなかった。

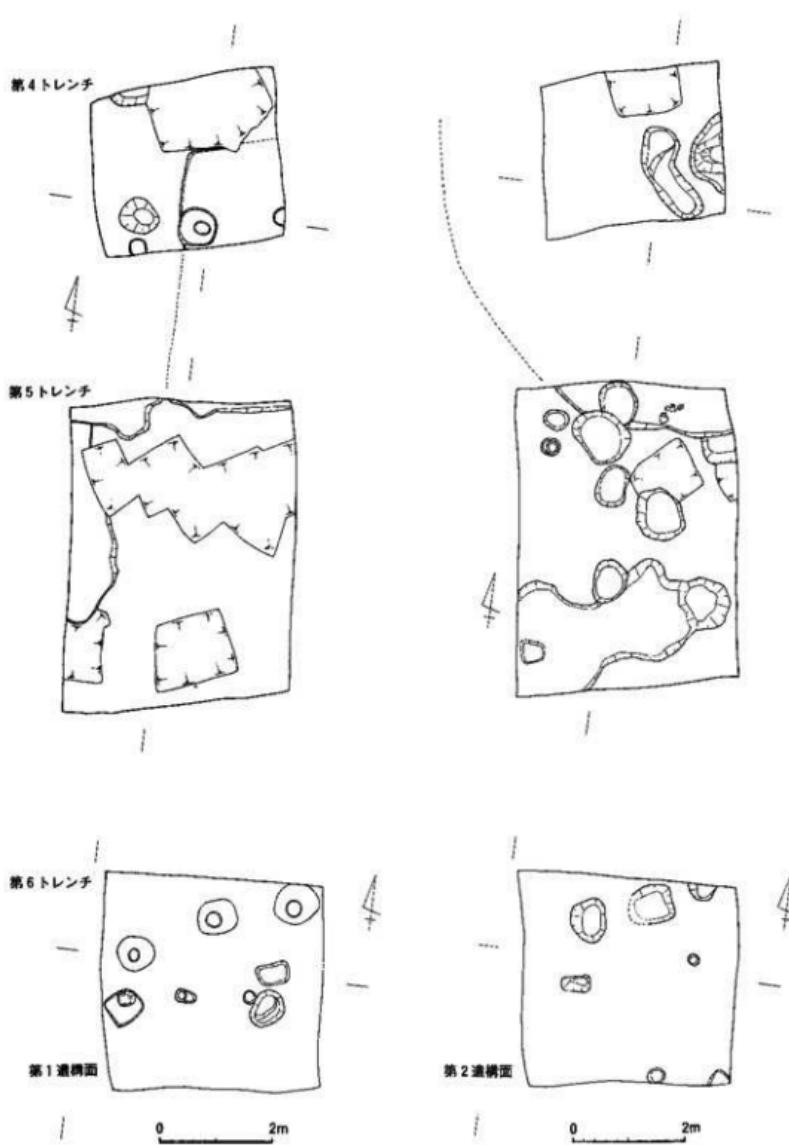


fig. 22-VI-5. 第4～6トレンチ平面図

第7トレンチ

遺構面は1面のみ確認することができた。中央に攪乱坑があるが、これに一部破壊されながらも検出されたSX02（南北6m、東西5m）には、多量の弥生時代後期の土器が、石とともに投棄されていた。他に時期を確定できる遺構は乏しいが、南にある方形の土坑からは古墳時代後期の須恵器が出土している。SX01には焼土が含まれていたが、出土遺物もなく、その性格については不明である。



fig.22-VI-6. 第7トレンチ平面図



fig.22-VII-7. 第7トレンチ全景

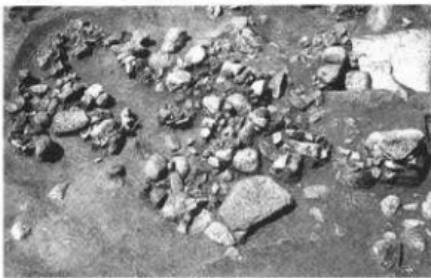


fig.22-VII-8. SX02

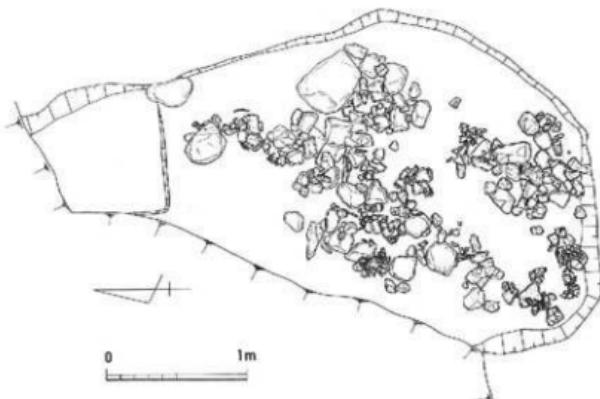


fig.22-9.  
S X02平面図



fig.22-10.  
S X02  
上器出土状況

#### 第8トレンチ

遺構面は1面のみ確認することができた。不定形の落ち込み（S X01）のほか、ピット多数を検出した。いずれの遺構からも遺物の出土が乏しいので、時期は明確にし難いが、S X01から土師器の高台付塼が出土していることから、S X01は平安時代前半頃に埋没したものと考えられる。

#### 第9トレンチ

遺構面は、2面確認されている。第1遺構面では、不定形の落ち込みを検出したが、遺物は、下層より出土した弥生土器がほとんどであり、時期については不明である。第2遺構面では、須恵器を含む土坑を検出した。これは、第7トレンチの南で確認した土坑と同一の性格のものと思われる。

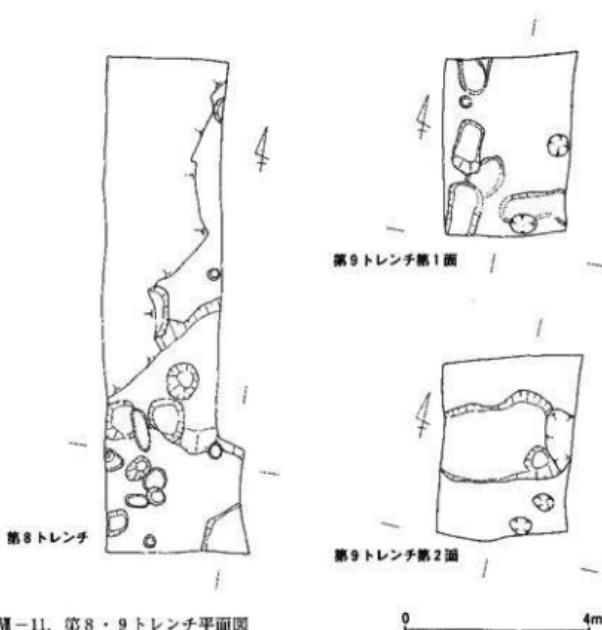


fig.22-VII-11. 第8・9トレンチ平面図

#### 遺物

出土した遺物は相当量にのぼるが、遺物包含層からの出土がほとんどであり、細片が多い。そのような中にあって、第3トレンチのSK01・04・05、第5トレンチのSK05、第7トレンチのSX02などの第2遺構面の遺構からは良好な弥生土器が出土している。特に第7トレンチのSX02出土の土器は、弥生時代後期後半の良好な一括資料としても重要である。また、第6トレンチの遺物包含層からは鉄刃状の鉄片、第7トレンチの遺物包含層からは袋状鉄斧が出土している。どちらも遺物包含層からの出土であり、時期については明確にできないが、古墳時代の所産ではないかと考えられる。

#### 2.まとめ

今回の調査においては、郡衙との直接的な関わりを明確にすることはできなかったものの、平安時代頃の比較的大型の掘形をもつ柱穴が確認され、郡衙に関わる何らかの建物が存在したことを予想させるものとして重要なである。

また、弥生時代と古墳時代の竪穴住居と考えられる落ち込みも確認されたことで、この時期の集落としては、六甲山南麓の集落遺跡の中で、最大の広がりを持つものと考えられる。

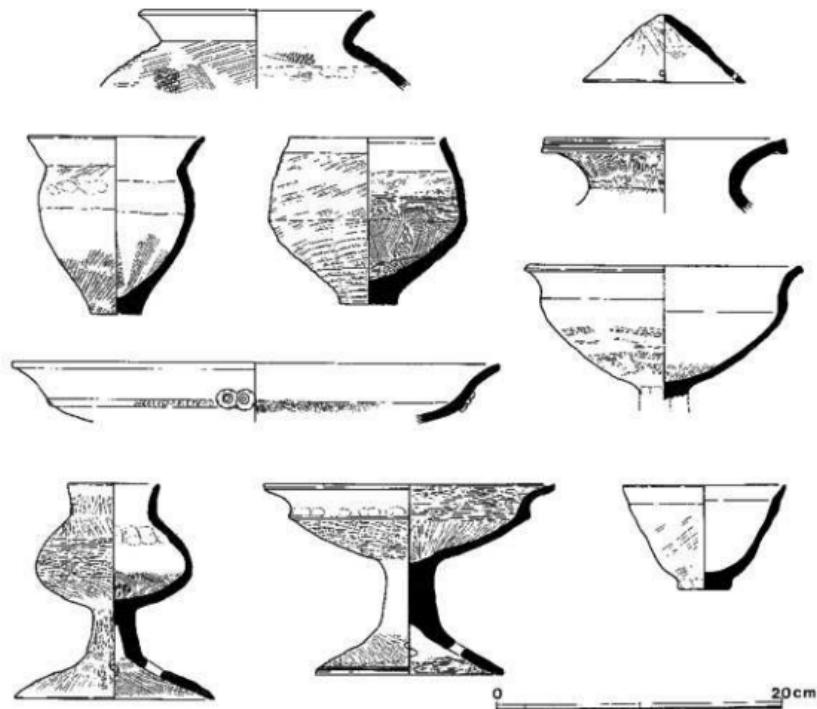


fig. 22-12. 第7トレンチ S X 02遺物実測図

## VII. 下山田地区第2次調査

### 1. 調査の概要

今回の調査は、昭和61年実施の下山田地区第1次調査地点の北側で、建物設計変更に伴う調査である。

S B02

S B02は、S B01とは90°向きを変えた南北棟の建物である。北側は調査区外にさらに延びる為、建物の規模はわからないが、検出された範囲では桁行3間(4.50m)×梁行4間(5.80m)以上の建物となる。主軸方向はN 15°30'Wを測る。柱穴の掘形の形状は60cm×60cmの隅丸方形のものが多く、他にやや大きめのものもある。柱痕の大きさは直径22~25cmで、掘形の刺には小さいようである。現存する掘形の深さは40cm~60cm程である。遺物は掘形の埋土内より土師器の小片が出土したのみで時期は不明である。

S D01

S D01は、調査区の北東隅において北から南に流れ途中で屈折して南東に向きを変える。今回の調査内では、幅1.2m~1.6mを計るが、深さは約0.1mと浅く、底は平坦である。中世以降の開墾時に削平されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。



fig.22-1. 調査区平面図・S B02断面図



fig.22-図-2.  
S B 02・S D 01

## 2.まとめ

今回と前回の調査より、当地区の遺構は、ほぼ同規模（3間×4間）の掘立柱建物が棟方向を90度違えて建てられていたことがわかった。このことより、主屋はコまたは、口形に整然と配されていたことが予想され、その横にS B 03のような副屋が方向を合わせて建てられていたと考えられる。これらの建物は柱穴内より時期を確定できる遺物がほとんど出ていないためいつごろ建てられたかは不明であるが、掘形が大きいことや、計画性をもった建物配置、また前年度、建物包含層より10世紀代の灰釉陶器や綠釉陶器が出土したことから、平安時代郡衙の建物の一部である可能性がある。しかし、昭和61年度に調査された郡家遺跡城の前地区や、昭和62年度に調査された生田遺跡などでは、古墳時代後期の比較的大きな掘形を持つ掘立柱建物が発見されており、その時代の建物跡の可能性も考えておく必要があり、今後の付近の調査によって検討する必要がある。

当地区的調査地は前年度と今年度あわせて約250m<sup>2</sup>という狭い範囲であるため、遺跡の全体像は明らかではないが、もし郡衙関係の建物であるとすれば、昭和54年度に調査された郡家大蔵地区につづいて郡衙跡と考えられる遺構が発見された意義は大きい。

## IX. 下山田地区第3次調査

### 1. 調査の概要

調査は、旧耕作土まで重機により掘削し、さらに中世、近世の遺物を含む暗赤褐色粘性砂質土までを人力によって除去した。その結果、調査地北東部において弥生時代後期の土器を含む暗褐色粘性砂質土を検出した。検出面は、調査地北東部現況地表面から約70cmを測る。

一方、旧耕作土の床土を除去した段階で、調査地中央において東西方向に並ぶ石列を検出した。この石列より南側には、青灰色粘質土・黄褐色粘質土の旧水田の耕土・床土と考えられる土砂が部厚く堆積し、落ち込んでいる。このような状況から、水田は棚田状に造成され、石列は畦畔の基礎石と推定される。したがって、調査地の旧地表は北東から南西方向に傾斜していることが判明した。さらに調査地西端の攪乱坑内を清掃した結果、床土直下（現地表面より1.4m下）で、弥生時代後期の遺物包含層を検出した。したがって、弥生時代後期の遺物包含層は、約70cmの比高差で北東から南西に傾斜していることが判明した。

なお、マンション建設工事に伴う基礎掘形は現状地表高から80cmにとどめ、包含層の削平が予想される部分についてのみ包含層を除去して、遺物の採集を行った。

出土遺物は旧床土と暗赤褐色粘性砂質土中より中世の須恵器・土師器・青磁器片などが出土している。暗褐色粘性砂質土から、壺底部片をはじめとする弥生土器片が出土している。弥生土器底部片の形態から弥生時代後期末葉の時期が考えられる。



fig.22-IX-1.  
調査地全景



fig.22-IX-2.  
包含層上面



fig.22-IX-3.  
石列

## 2.まとめ

今回の下山田地区の調査では、良好な弥生時代後期の遺物包含層を検出した。この結果、包含層の良好な保存状況から、弥生時代の集落遺跡等が当地域に存在すると考えられる。

## X. 地蔵元地区第3次調査

### 1. 調査の概要

今回の調査は、マンション新築工事に先立ち、昭和62年3月に試掘調査を実施した結果、遺物包含層が確認されたため、約700m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することとなった。

重機により、盛土及び旧耕土・旧床土を約2m除去した後、人力により、遺物包含層を掘り下げた。

調査区北側では、盛土直下で暗褐色粘質土層（遺物包含層）が検出され、その下が茶褐色バイラン土層（地山）となる。調査区南側は、盛土を除去した状態で、現状では一段下がっており、旧耕土・旧床土を除去すると淡茶灰色砂礫土層（ボルダー層）となる。

調査区南側については、ボルダー層上面まで掘り下げた後精査を行ったが、全く遺構は検出されず、遺物もほとんど出土しなかった。なお、調査区北側の180m<sup>2</sup>については、遺物包含層は若干削平を受けているが、遺構面（地山面）は比較的遺存状況が良好である。

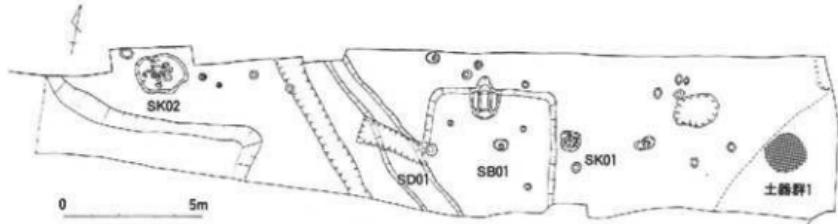


fig. 22-X-1. 調査区平面図



fig. 22-X-2.  
調査地全景

SB01

調査区北側の中央付近で検出された竪穴住居で、南壁は後世の削平により失われているが、それ以外の壁面については遺存状況はかなり良好である。平面形は方形を呈し、南北5.0m以上・東西4.8m・深さ0.4mを測る。床面では、ピットを5ヶ所検出したが、主柱穴は明らかにできなかった。おそらく4本柱であった可能性が高い。壁面は三方とも、ほぼ垂直に立ち上がるが、周溝は確認できなかった。また、北壁のほぼ中央に馬蹄形状のカマドが検出された。カマドの大きさは、幅が1.1m・奥行きが1.5mを測る。焚口部は、火熱により著しく赤変しており、カマド壁面も若干焼けている。焚口の南側は炭が多く堆積しており、焚口より炭をかき出したものと考えられる。また、揮出し部のところは、住居址のプランよりもやや北方へ張り出している。

なお、住居床面直上より、須恵器壺蓋・甕、土師器甕が、出土しており、住居覆土内より、須恵器壺蓋・坏身・高坏・甕、土師器甕が出土している。出土遺物より、6世紀後半頃の時期に属するものと考えられる。

SK01

SB01の東方約20cmで検出された隅丸方形の土坑で、南北70cm・東西70cm・深さ20cmを測る。埋土内には、こぶし大よりやや大きめの礫がみられた。遺物が出土しなかったため、時期については明らかでないが、SB01に伴うものである可能性が考えられる。

SK02

調査区北西部で検出された楕円形の土坑である。長径2.0m・短径1.4m・深さ20cm~25cmを測る。土坑中央付近では、人頭大の花崗岩の円礫が、底面より若干浮いた状況で検出されており、礫の上に須恵器の甕がつぶれた状態で出土した。出土遺物より6世紀末葉頃の時期に属するものと考えられる。



fig.22-X-3.  
SB01



fig.22-X-4.  
S B01カマド



fig.22-X-5.  
S K 02

S D01

調査区北側中央で検出された溝状遺構で、北西から南東へと伸びている。幅70cm～140cm・深さ10cm～25cmを測る。S B01の西壁の一部を切っている。埋土内より鎌倉時代頃の須恵器・土師器が出土しており、同時代に属する可能性が高い。

## 土器群1

調査区北東部で検出された土器の集中する地点で、自然河道の肩部付近である。南北1.4m・東西1.6mの範囲で、弥生時代後期後半の壺・甕・高坏等が出土している。

これらの遺構の他に、径20cm~30cmのピットが数ヵ所みられるが、建物址としてまとまる可能性のあるものはない。いずれのピットも所属時期が明確ではないが、おそらく古墳時代後期、あるいは鎌倉時代のものがほとんどであると考えられる。



fig.22-X-6.

土器群1

## 遺物

S B01の床面から出土した須恵器・土師器は、当時の現位置をほぼ良好に保っていると考えられ、6世紀後半に比定される。

S K02の出土遺物は、6世紀末頃と考えられ、S B01よりやや新しいものと考えられる。

また、S D01の出土遺物は、鎌倉時代のものと考えられる。

土器群1の遺物は、弥生時代後期後半の壺・甕・高坏等であり、調査区北方より流入してきたものと考えられる。

## 2.まとめ

今回の調査により、古墳時代後期の集落址の一部が発掘されたが、西側の隣接地で城の前地区第25次調査が実施された際に、同時期の堅穴住居状遺構が検出しており、さらに周辺地域において同時期の住居址等の遺構が発見される可能性は高い。

また、弥生時代・鎌倉時代の遺構・遺物が検出されていることから、同時期の集落が付近に存在する可能性が考えられる。

後世の削平及び擾乱が著しく、調査区北側にしか遺構面は残存していないかったが、弥生時代～鎌倉時代にわたる遺物が出土し、古墳時代後期の集落址の一部が検出された意義は大きいといえる。

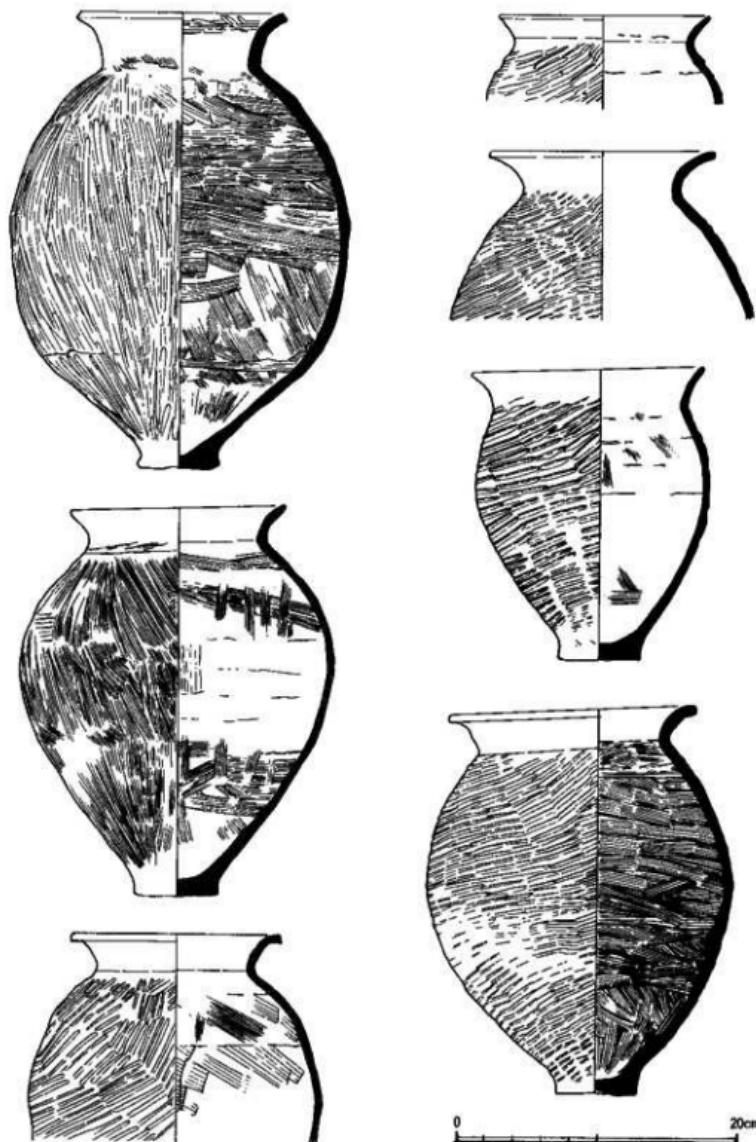


fig.22-X-7. 土器群1出土遺物実測図1

0 20cm

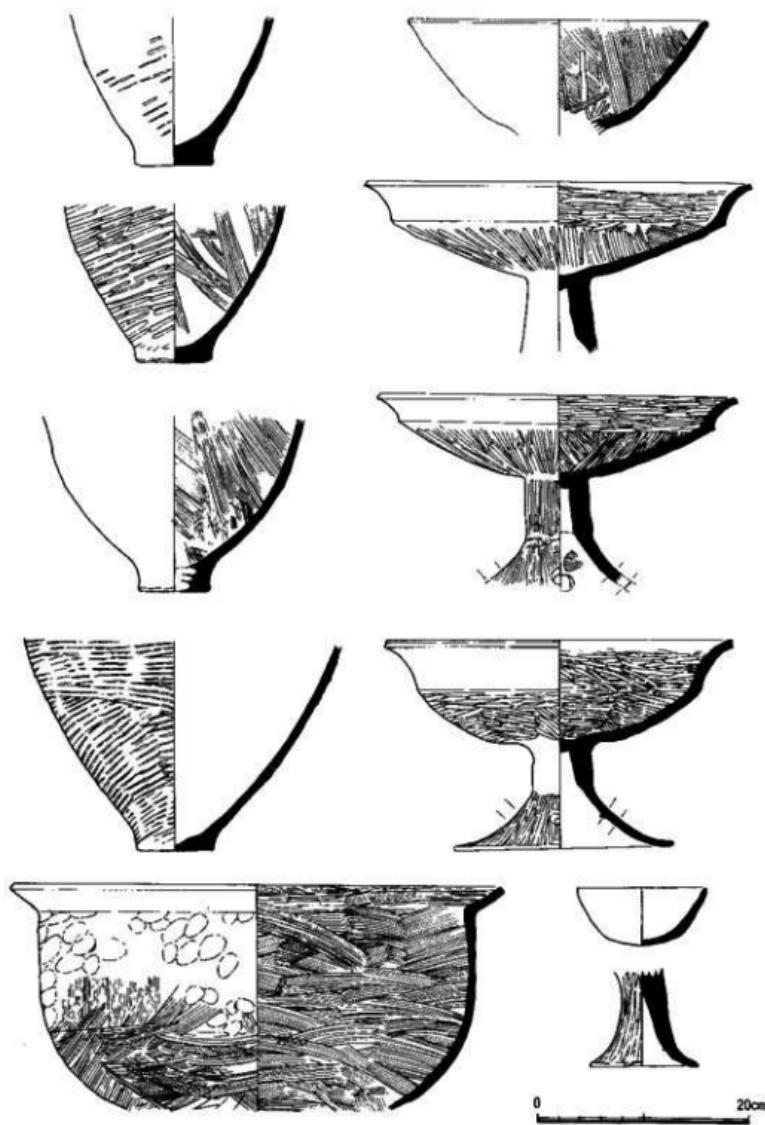


fig. 22-X-8. 上器群 1 出土遺物實測圖 2

## X I. 岸本地区第2次調査

### 1. 調査の概要

今回の調査により検出された遺構は、竪穴住居（S B01）1棟、土坑（SK01・02）2基である。

#### S B01

直径11m・深さ60cmを測る竪穴住居である。

竪穴住居内の施設としては中央土坑のほか、80cm×60cm・深さ30cmの土坑が住居址の北東部に存在し、また、中央土坑の周辺に小ピット群が認められた。

中央土坑は平面プランが方形で130cm×100cmをはかる。漏斗状にすぼまり、その深さは70cmである。覆土は黒く変色した真砂土で、上層から弥生土器の破片が出土している。

その他、中央土坑の南で住居址の床面が焼けしまっている部分が確認された。そこからは、押し潰されたような状態で弥生土器が出土している。この住居址の覆土からは弥生土器、平安時代の須恵器が出土しているが、床面出土の土器から、この住居址の年代は弥生時代後半と考えられる。

#### SK01

120cm×100cmの楕円形を呈する深さ30cmの土坑である。覆土からは、黒色土器の破片など平安時代の遺物が少量出土している。また、この遺構の付近から、平安時代の綠釉陶器片が出土した。

#### SK02

攪乱により一部を破壊されているが、一辺80cm・深さ30cmと推定される土坑である。土器の小破片が覆土から出土しているが、その時期は明らかにしがたい。

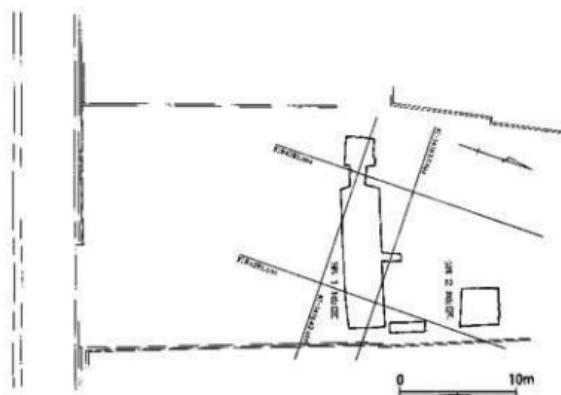


fig.22-XI-1. 調査地区設定図



fig.22-II-2. 第1地区平面図



fig.22-II-3. 第1地区全景



fig.22-II-4. 中央土坑

## 2.まとめ

今回の調査の結果、当地に弥生時代・平安時代の遺構・遺物が存在することが確認された。

なかでも弥生時代の径10mをこえる大型住居址が確認されたのは、市内において北区長尾町内垣宅原遺跡、西区玉津町高津橋岡遺跡に続き3例目であり、注目される。

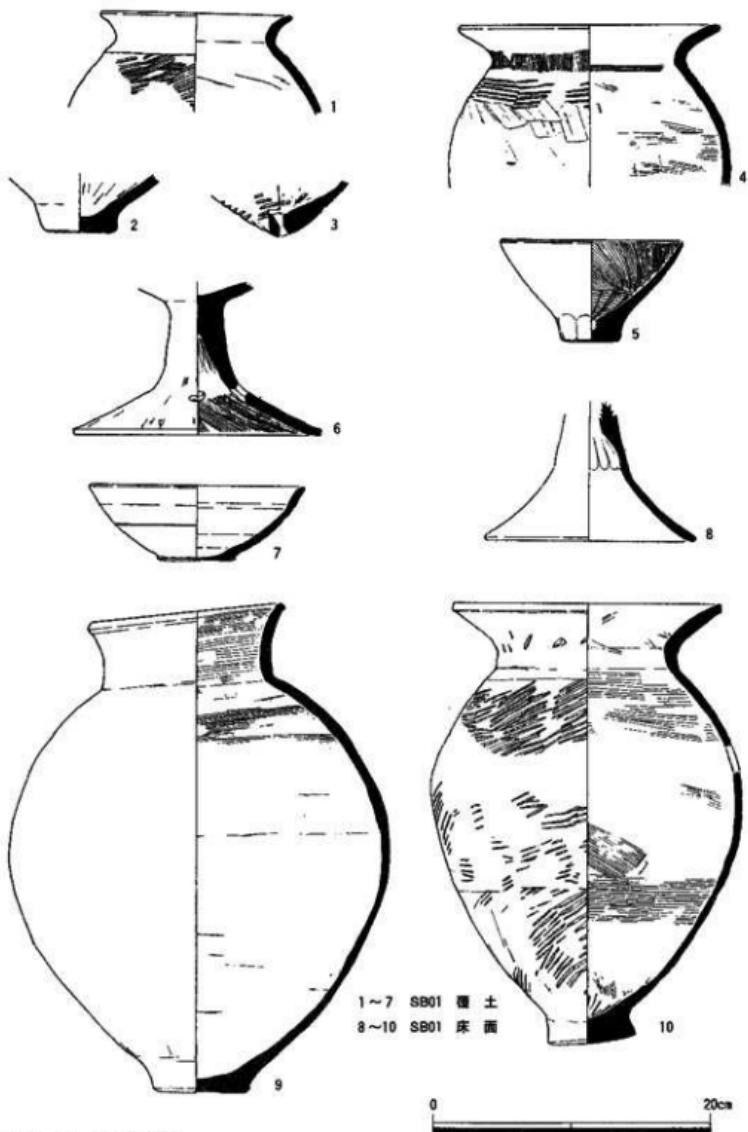


fig.22-II-5. 遺物実測図

## 23. 森北町遺跡—第4次調査—

## 1. はじめに

森北町遺跡は、六甲連山より南へ延びてきた丘陵の裾部に位置し、縄文時代晚期より始まる遺跡として知られている。

今年度実施の第3次調査地点の西隣の松風荘敷地内で、昭和39年に浄化槽建設工事の際、完形品を含む多量の弥生土器が出土したため、森北町遺跡は周知されるものとなった。この後、神戸市教育委員会によって発掘調査が2度実施されている。昭和57年度の調査では、弥生時代中期の溝1条が検出された。また、昭和60年度の調査では、古墳時代中期の堅穴住居2棟と旧河道などが確認されており、縄文時代晚期・弥生時代末葉～古墳時代初頭・古墳時代中期の遺物が多量に検出されたほか、前漢鏡片が検出された点は注目される。

共同住宅建設工事に先立ち、試掘調査を行った結果、弥生土器、須恵器を含む層が検出された。このため、工事により遺跡が破壊される部分について、発掘調査を実施することになった。



fig. 23-1.

## 2. 調査の概要

今回の調査地は厚い包含層に覆われており、各時代の包含層が確認できた。遺構としては竪穴住居1棟と自然流路及び溝等を検出したのみであったが、自然流路内より多量の土器類が出土し、大きな集落の存在が考えられる。

### 自然流路

調査地の西隅で、深さ1mの自然流路を確認した。流路は調査地外に伸びており、幅等の規模は不明である。

流路下層からは弥生土器が出土している。ほとんどがV様式に比定できるもので、庄内並行期に比定できるものは存在しない。流路中層から上層にかけては、庄内並行期に比定できる土器が出土している。

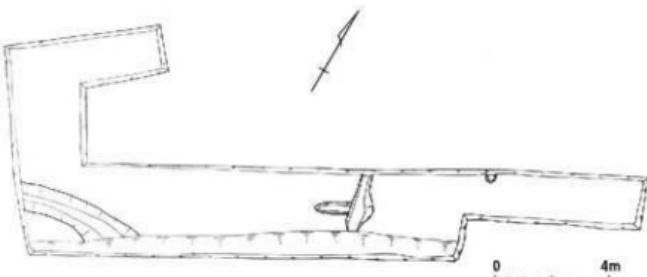


fig.23-2.  
上層遺構面平面図



fig.23-3.  
上層遺構面全景

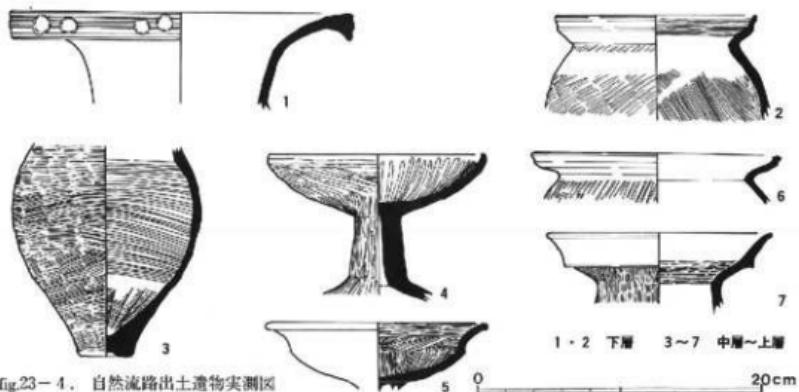


fig.23-5.  
下層遺構面平面図

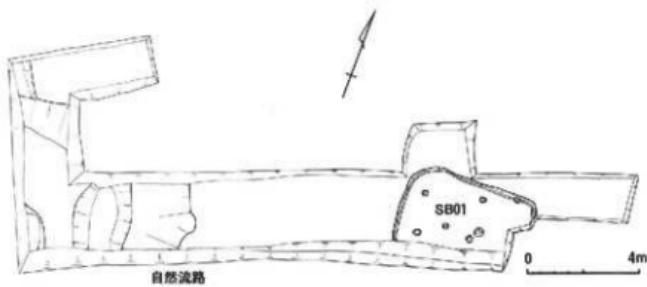


fig.23-6.  
下層遺構面全景



S B01

東西4.4m・南北3m以上・深さ30cmを測る方形堅穴住居である。柱穴は8本検出したが、整然とした配列をなしておらず、建物の上部構造を推測するには至っていない。昭和60年度の調査で検出しているS B01の柱の配列に類似している。

住居の床面からは遺物は出土していない。ただし埋土内からは壺が出土している。また床面からやや浮いた状態で、口縁端部の内面がやや肥厚する壺や須恵器の壺が出土している。これらの土器はTK 208型式に並行するものである。

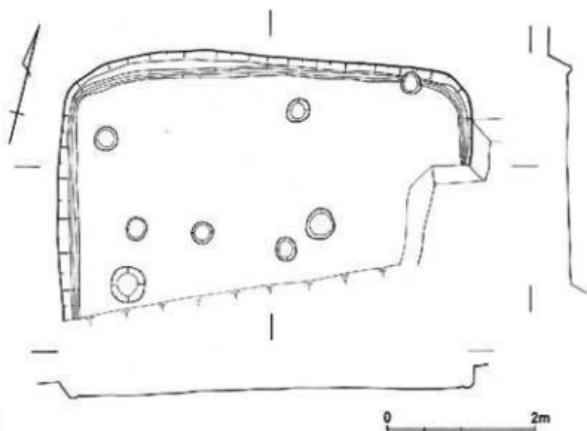
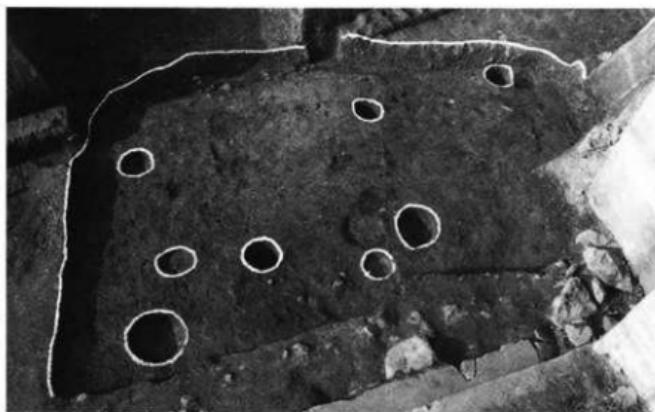


fig.23-7. S B01平面図

0 2m

fig.23-8  
S B01



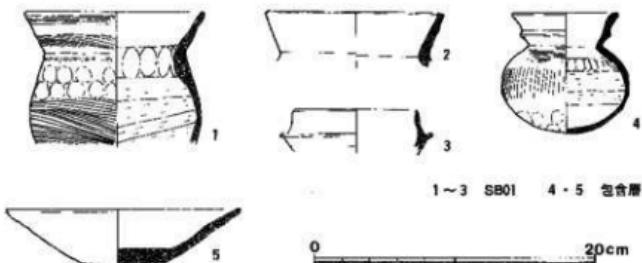


fig.23-9. 遺物実測図

## 3.まとめ

今回の調査では遺構は少なかったものの、各包含層から各時代の遺物が確認された。このことから森北町遺跡は、縄文時代から近世に至るまで続いている遺跡である可能性がうかがわれる。特に包含層からではあるが、奈良時代の遺物がある程度まとまって出土していることは今後の調査を行ううえで注意が必要である。

自然流路は出土遺物から、弥生時代末を上限として存在し、古墳時代初頭にはほぼその機能を失っていたようである。昭和60年度の調査では古墳時代初頭から中頃にかけての自然流路が確認されており、短期間のうちに流れを変えたと考えられる。この頃には頻繁に氾濫が起こっていたと考えられ、そのなかでも確実な遺構が確認されている弥生時代末から古墳時代前期と、古墳時代前期から中期に比較的広範囲にわたる氾濫が起こっていることは興味深い。

住居は遺構に伴う遺物を持たないため、確定な時期を決めることが困難であるが、埋土の遺物などから古墳時代中頃に比定できる。昭和60年度の調査で確認しているSB01とほぼ同時期と考えられる。住居の平面プランが類似しており、そのプランの特殊性から、この地域独特の建築様式をこの時期に持っていた可能性がある。しかし、住居の完全な平面形がつかめていないため、どのような上部構造となるかは不明な点が多い。今後の資料の増加を待ちたい。

また、輪式系土器が当調査地でも出土している。森稻荷神社の西方は輪式系土器の出土が密であり、この遺跡の性格を考えるうえで1つの特色としてあげうる。

また自然流路から出土した弥生土器・土師器はその遺構の性格から層位的に編年を組み立てることは困難と思われるが、この時期のまとまった資料に極めて乏しい当地方では、大きな意味を持つ遺物ということができる。

## 24. 本山遺跡

### I. はじめに

本山遺跡は、神戸市東灘区本山中町4丁目から田中町1丁目に所在し、六甲山系の一峰である金鳥山の南麓に位置している。当遺跡は、芦屋川と住吉川によって形成された複合扇状地上に立地し、天上川の左岸に存在している。

本山遺跡において発掘調査が着手されたのは、昭和58年度からであり、今までの調査で、縄文時代晩期から弥生時代中期末の土器を多量に出土した自然流路等が検出されている。

今年度は、民間の住宅建設に伴い、3ヵ所の地点で調査を実施した。

### II. 第1次調査

#### 1. 調査の概要

調査地は、48×17mの長方形で、西半は建物基礎の入る部分のみ、東半約410m<sup>2</sup>は全面調査を実施した。

遺構は、現地表下1.0~1.6mの深さで確認できる。層序は、西半部では、上から近年の盛土、洪水砂（厚さ0.6~0.8m）、中世水田、茶褐色シルトの遺物包含層、遺構は、暗黒灰色シルト層上面から掘り込まれている。暗黒灰色シルト層は、湿地に堆積したもののように遺物は全く含まない。

東半部は、洪水砂が存在しないだけで、その他の層序は、西半部と同様である。西半部では、No1・2グリットで遺構を検出した。No1グリットで溝状の遺構、No2グリットでは、大きな土坑の一部と考えられる遺構が検出され、土坑内には人頭大の石が乱雜に入り、その間から瓦、陶器、磁器、土師器などが出土地した。東半部では、掘立柱建物、溝、土坑、井戸などが検出されているが、それらは調査区の東半に偏在している。

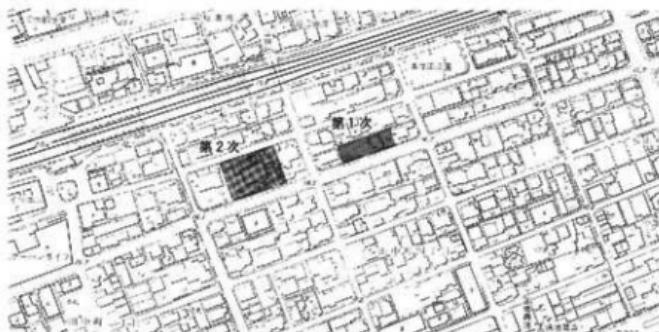


fig. 24-1.  
調査地位置図

掘立柱建物（S B01）は1棟のみで、2間（4m）×1間（2m）以上で、柱掘形、柱径ともに小さく、小規模な建物のようである。柱穴から遺物の出土はなかった。

溝は、幅1m前後・深さ0.5m前後のS D01が最も大きく、その他のものは幅0.2~0.5m・深さ0.1~0.3mと小規模で、S D01にすべて接続している。

土坑（S K01）は1基のみで、一辺約1.2mの方形で、深さ0.5m程度であり、埋土内からは、土器類、陶器が出土している。西辺には石積みがみられるが、他の辺には元から存在しなかったようである。

井戸（S E01）は1基で、S D01に掘形の一部が切られている。検出面から0.7mまでは石積みの井側で、内法は径0.7mである。その下部には段が作られ、石敷がみられる。その石敷は井側石積みの根太をも兼ねさせている。段の下は、径0.25m・深さ0.2mの疊まじりの粗砂で、湧水の濾過を目的にしたものであろう。

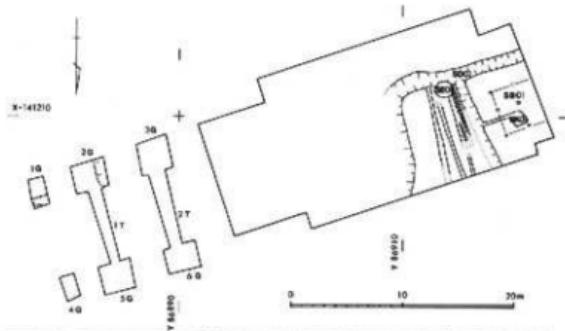


fig. 24-2. 調査区及び遺構配置図

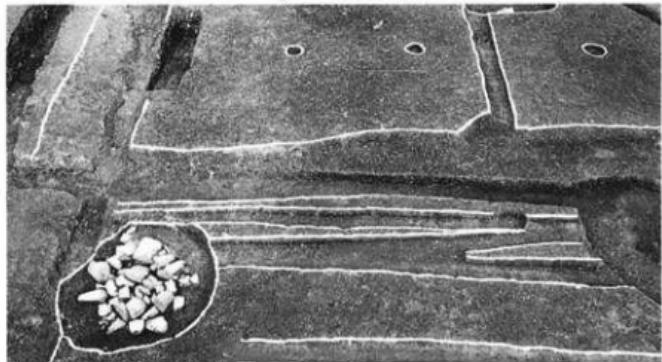


fig. 24-3.  
調査区東半部

井側内は、井戸を放棄した際に井側の石積みを落としたらしく、石で充填されていた。また、井筒の曲物内には粘土、砂が堆積していたが、種子、木の葉、枝などが混ざっており、使用中に徐々に堆積したようである。

遺物はごく少なく、土師器の小片が数片みられたのみである。

No. 2 グリット、S D01、S K01から出土した遺物は、いずれも15世紀後半に位置付けられる。

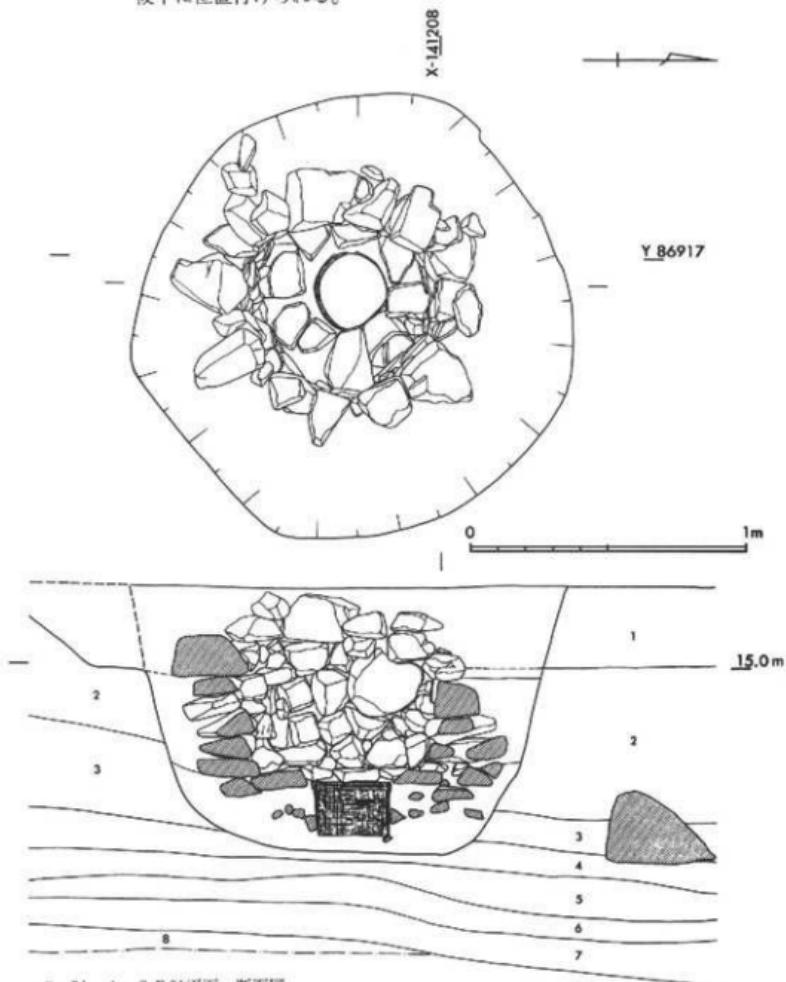


fig. 24-4. S E01平面・断面図



fig. 24-5.  
S E01廐棄狀況

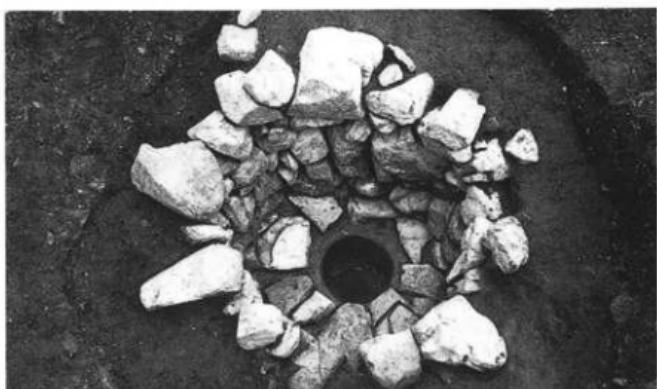


fig. 24-6.  
S E01検出狀況



fig. 24-7.  
S E01断面

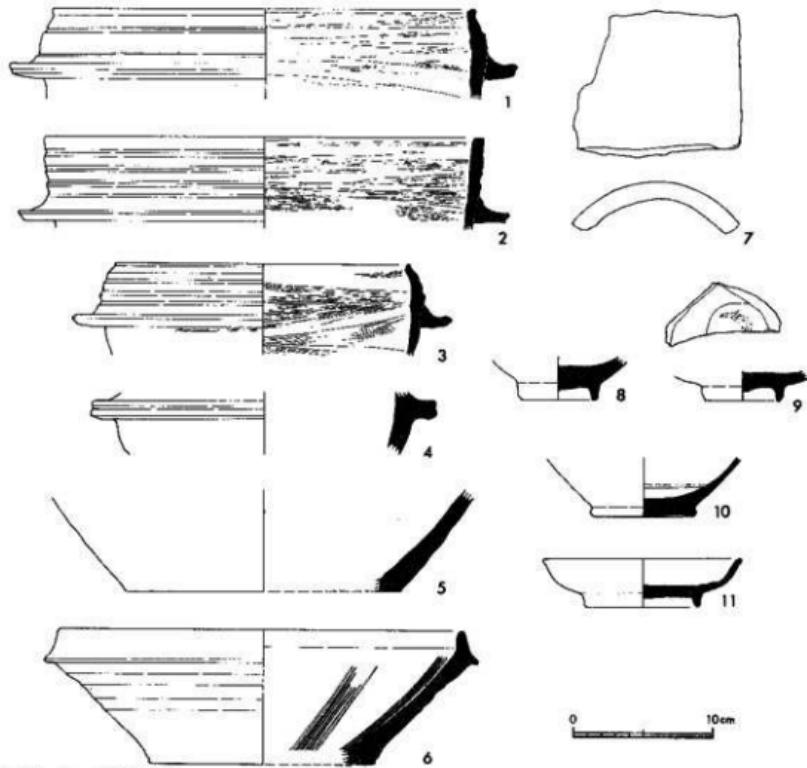


fig.24-8. 遺物実測図

## 2.まとめ

当初予想された弥生時代の遺構は全く存在せず、中・後期の土器片がわずかに出土したのみである。出土した遺構は、すべて室町時代に属するとと思われ、それらは集落のごく一部を表すと考えられる。すなわち、S D01によって区画された屋敷地内に S B01が建てられ、S K01は台所排水のための土坑で、それに接続する溝で S D01に流していたと考えられる。S E 01は S D01に切られているといふものの、堀形のごく一部であり、同時に存在した可能性は高く、この屋敷地に居住する人によって使用されたのであろう。

市内では、室町時代のこのような遺跡は、今まで類例がなく、貴重な資料といえよう。今後周辺で調査が進むにつれ、当地域の室町時代の集落の形態が明らかになるであろう。

### 三、第2次調查

## 1. 調査の概要

調査対象地区は、北から南への傾斜地であるが、近世の水田造成により遺構面がかなり削平されていた。西半部には、その近世造成時に耕地として利用されていた痕跡と考えられる溝状の遺構が、畑の谷のように残されていた。

また、南部が大きく削り取られ、崖状をなしているが、それに沿うように S D01・02が存在する。これらは、幅0.6~0.7m・深さ0.9mで、壁面は垂直に落ち、底面は水平である。先の畠状の遺構より後出することが、切り合い関係から判断できるが、遺物からの時期判定は困難で、近世に属するものとしかいえない。

S X01は、弥生時代後期末に属する遺構である。平面形は、2.5m程度の方形で、深さは0.1mと浅いが、一部0.3mと深い部分があり、そこから甕形土器2個体が出土している。また、磨製石包丁も出土しているが、後期末には、一般的に存在しないため、流入かと考えられる。竪穴住居跡とするには規模及び柱穴に難点があり、性格不明の遺構である。

S K01は、長楕円形の土坑であったと考えられる。現存の長さ1.3m・深さ0.3m程度で、弥生時代後期末に属する壺形土器の頸部以上と壺形土器が出土した。これもまた、性格不明の遺構である。

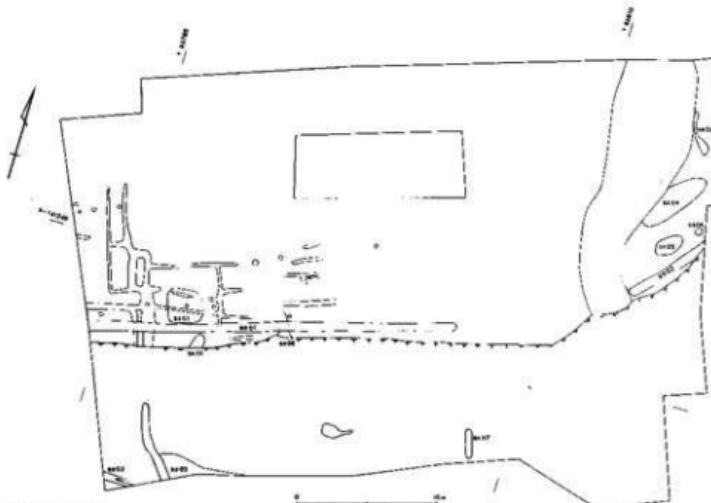


fig. 24-9. 調査区平面図

S X02も後期末の遺構である。S X03～S X08については、いずれも須恵器を伴わず、弥生時代終末期から古墳時代前期に属すると考えられる。また、いずれの遺構もその性格は明らかでない。

調査区の東部に流路の底面のみが残っていた。検出面から最も深い部分で0.4m前後で、かなり削平を受けていると考えられる。埋土は疊混じりの粗砂で遺物は、古墳時代後期のものを中心には比較的数多く出土している。



fig. 24-10.  
西半部溝状遺構



fig. 24-11.  
西半部溝状遺構



fig. 24-12.  
流路及び土坑



fig. 24-13.  
流路及び土坑



fig. 24-14. S X01土器出土状況



fig. 24-15. S K01土器出土状況

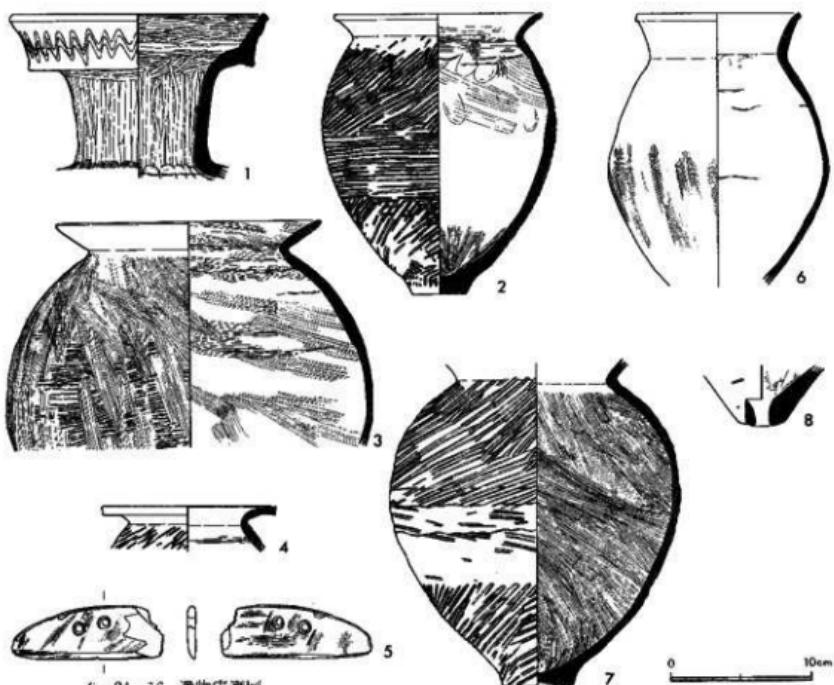


fig. 24-16. 遺物実測図

## 2.まとめ

本山遺跡は、本山村誌に見られる宇非戸田付近出土遺物を代表例とする縄文時代および弥生時代前・中期の遺跡として周知されてきた。そして、昭和58年度に平安博物館によって実施された調査でも多量の遺物が出土し大部分は弥生時代第Ⅰ～Ⅱ様式に属するものであった。

今回の調査は、先の調査と位置的に近接しており、調査着手前から多くの成果が期待されていたが、近世およびそれ以降の削平が著しく、それ以前の遺構の大部分が失われていた。しかし、わずかに残された遺構から出土した遺物は、これまでの当遺跡では知られていなかった時期のもので、弥生時代後期後半から末に属する遺物が主体であった。また、流路内からは、古墳時代後期の遺物も出土しており、これまでの調査では知られていなかった時代にも当遺跡が存続していたことが明らかになった。

当遺跡の所在する六甲山系南麓は、弥生時代、遺跡の密集地域であるが、前期から後期にまで継続する遺跡は稀である。今日までの調査では、住居等の明確な遺構は検出されていないが、拠点集落の一つと考えて差し支えないであろう。

ほくじん  
25. 北神第2・3地点遺跡

### 1. はじめに

第2・3地点周辺は、六甲北ニュータウン北神戸第一地区開発予定区域内であるが、既に古墳の存在が周知されていたため、当地点については、保存区域となっていた。

現在、第2・3地点のすぐ西隣が墓地となっているが、この度、墓地を拡張するにあたり、第2・3地点の墳丘の規模を確認し、保存区域と工事可能区域の範囲を明確にするため、墳丘部分の試掘調査を実施することになった。なお、横穴式石室等の内部主体については、今後も現状のまま保存されるため、今回は、発掘調査を行わなかった。

周辺には、直径10m前後の円墳を中心とした後期の群集墳が多く存在している。



fig. 25-1.  
調査地位置図



fig. 25-2.  
調査地全景

## 2. 調査の概要

### 第2地点

第2地点は、東向きに開口する横穴式石室を有する円墳であり、墳丘の裾部を確認するため、5方向に幅1mの試掘トレーンチを設定し、人力により掘り下げた。

試掘調査の結果、5ヵ所において墳丘裾が確認され、これらの成果を検討すると、墳丘の長径20m・短径16m・墳丘の高さ約2.5mの梢円形墳である。

南東方向に片袖式の横穴式石室が開口している。玄室長4.2m・玄室幅2.1m・玄室の現存高は1.9m・羨道長4.5m・羨道幅1.1mを測る。石室の側壁には持ち送りがみられるが、天井石は残存していない。石室の石材は、いずれも周辺から運んだと考えられる凝灰質砂岩である。



fig. 25-3.  
第2地点  
横穴式石室

### 第3地点

第2地点の南方約15mの同一尾根上に立地しており、前方部を北に向いた小型前方後円墳である。

墳丘の裾部を確認するため、幅1mの試掘トレーンチを10ヵ所設定し、人力により掘り下げた。

試掘調査の結果、7ヵ所において墳丘裾が確認され、これらの成果を検討すると、全長約33m・後円部径約23m・後円部の高さ約3m・前方部幅約18m、前方部の高さ約2mである。墳丘の主軸方向はN 40°Eを測る。後円部に南向きに石室が開口している。石室は、第2地点と同じく片袖の横穴式石室である。石室の主軸方向はN 7°Eを測る。玄室長4.6m・玄室幅1.5m・玄室の現存高は2.4mを測る。羨道長3.5m・羨道幅0.7m・羨道の現存高は0.8mを測る。石室の石材は、第2地点と同じく凝灰質砂岩を使用している。

また、4トレーンチ南端で、幅1.2m・深さ60cmの溝状遺構を検出した。

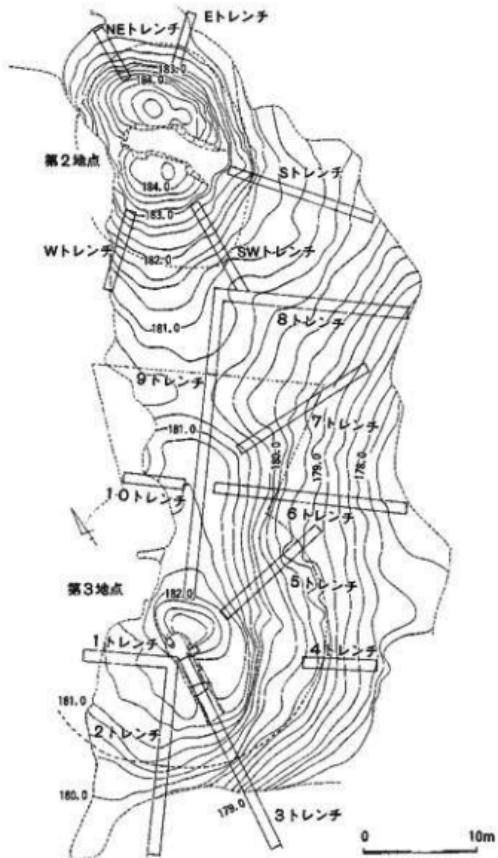


fig. 25-4. トレーンチ配置図



fig. 25-5.  
3 トレンチ



fig. 25-6.  
4 トレンチ  
溝状遺構

### 3.まとめ

試掘調査の結果、第2地点・3地点ともに墳丘の裾部が確認され、墳丘規模がほぼ明らかになった。

第2地点の円墳は、墳丘規模及び内部主体とも、周辺地域でみられる後期古墳とほぼ同様の特徴を示しているが、第3地点の前方後円墳は、北攝地域でも唯一の横穴式石室を内部主体とする前方後円墳である。

また、出土遺物より、第2・3地点古墳の築造年代は、6世紀前半～6世紀中葉頃と考えられるため、これらの古墳が、当地域における最も初期の、横穴式石室を内部主体とする古墳である可能性が推定される。

なお、今回の調査は、墳丘部分のトレンチ調査のみという限られた範囲内であり、また内部主体についても全く調査を実施しなかったため、古墳の明確な築造時期や追葬時期及び被葬者の性格等については、不明である。

26. <sup>はらの</sup>原野遺跡

## 1. はじめに

神戸市北区山田町は、六甲山地と帝釈山地との間を西流する志染川左岸上流域に位置している。

この地は、昔から三木、三田、西宮を結ぶ交通の要所として発展してきた。付近には、特異な容貌の仏像（国指定重要文化財）で有名な無動寺、若王寺神社、六条八幡神社等の古文化財が多く存在している。

また、下流約1.5kmの衝原には、室町時代に建築された日本最古の民家として知られる箱木千年家がある。

調査地の西方には、昭和61年度に県道三木・下谷上線道路改良事業に伴う発掘調査によって、弥生時代末の竪穴住居や平安時代の掘立柱建物等が発見された山田・中遺跡がある。

昭和61年12月11日に当該地の試掘調査を実施したところ、中世の土器を含む遺物包含層を検出した。そのため61年度工事施工部分約300m<sup>2</sup>について、昭和62年2月23日～昭和62年3月20日にかけて緊急発掘調査を行い、志染川の旧流路の一部と推定される河道を確認した。また、計画路線内の山林約20m<sup>2</sup>について、試掘調査を実施した。

残余の未調査部分約1600m<sup>2</sup>は、昭和62年4月13日から調査に着手した。

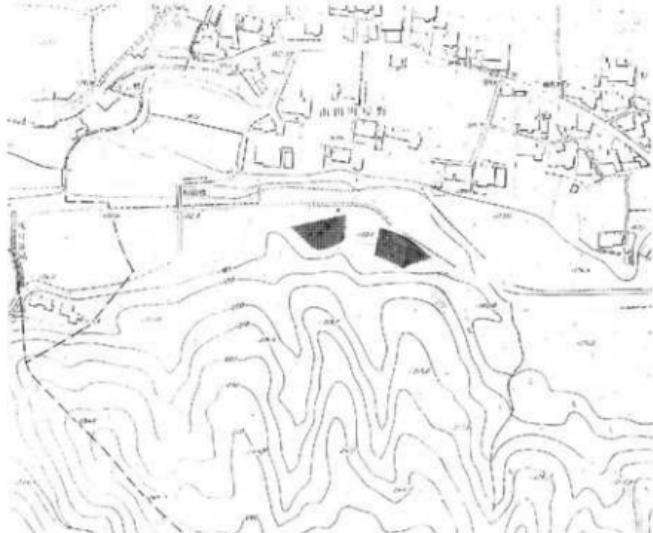


fig. 26-1. 調査地位置図

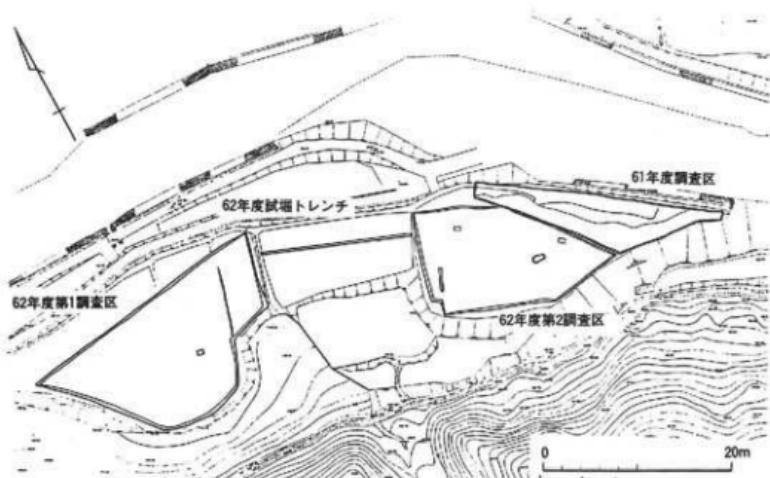


fig. 26-2. 調査区配置図

**2. 調査の概要** 発掘調査を架橋工事と並行して行うため、調査区を二分割した。西側を第1調査区とし、東側を第2調査区とした。

**第1調査区** 東西56m、南北28mの範囲で調査区を設定した。

基本層序は、耕土、床土、旧耕土、旧床土、暗灰色砂質土、黄茶色砂質土、暗灰色細砂、(地山)である。暗灰色砂質土から平安～室町時代の土器が出土した。遺構は、近世～現代の水田築成時の石垣が確認された。



fig. 26-3.  
第1調査区全景

## 第2調査区

東西40m、南北24mの範囲で調査区を設定した。

基本層序は、耕土、床土、旧耕土、旧床土、暗灰色砂質土、黃茶色砂質土である。暗灰色砂質土からは、平安～室町時代の土器が出土した。



fig. 26-4.  
第2調査区全景

## SK01

第2調査区では、焼土坑SK01および溝状遺構SD01を検出した。

調査区の東寄りで焼土坑が確認された。大きさは、最大長2.5m・最大幅1.5mの不整形である。底面は火によって一部赤変しており、炭がその上面に残存していた。深さは、遺構検出面から約4cm程度である。

埋土からは遺物は出土していないが、遺物包含層形成の時期以前、あるいはほぼ同時期と推定される。



fig. 26-5. SK01平面図

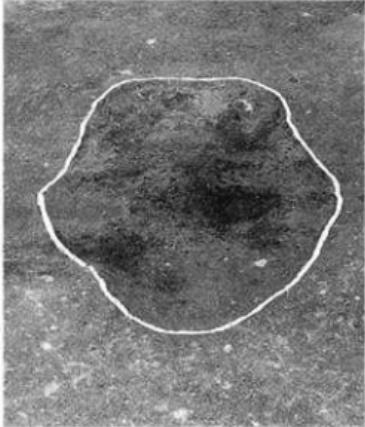


fig. 26-6. SK01

SD01

調査区の西端部で溝状遺構を検出した。大きさは、全長約4.8m・幅0.8m  
深さは約0.1mである。埋土からは、平安時代末～鎌倉時代の土器片が出土した。

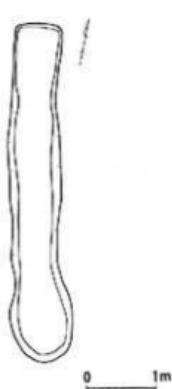


fig. 26-7. SD01平面図

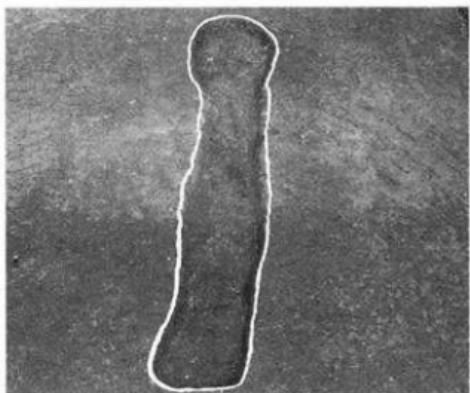


fig. 26-8. SD01

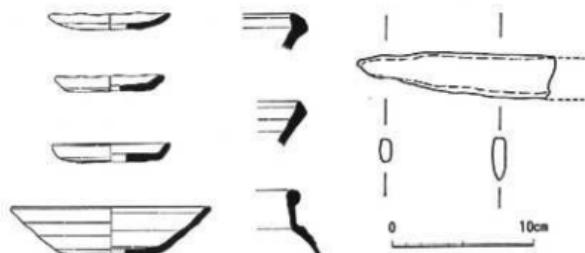


fig. 26-9. 遺物実測図

### 3.まとめ

昭和61、62年度にわたる調査の結果、志染川の旧流路と推定される河道  
跡、平安時代～中世の焼土坑、溝状遺構を確認した。

しかし、検出遺構の密度は疎であり、当調査地が遺跡の中心から若干はずれた地域に位置していることが判明した。

また、調査地が、現在の志染川水面からの比高差がわずかであり、川の  
氾濫の影響を受けやすい点から観ても、平安時代～中世にかけての集落遺  
跡は、北側の段丘上に分布していると考えられる。

とよとし  
27. 豊歳神社

1. はじめに 昭和61年度から継続されている重要文化財豊歳神社本殿の解体修理事業の関連事業として、本年度は防災施設の設置が行われることとなった。この設置工事にさきだち、発掘調査をおこなった。



fig. 27-1. 調査地位置図

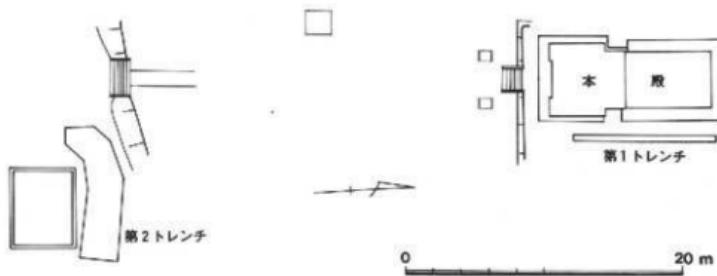


fig. 27-2. トレンチ位置図

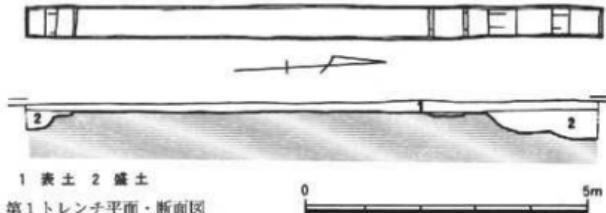


fig. 27-3. 第1トレンチ平面・断面図

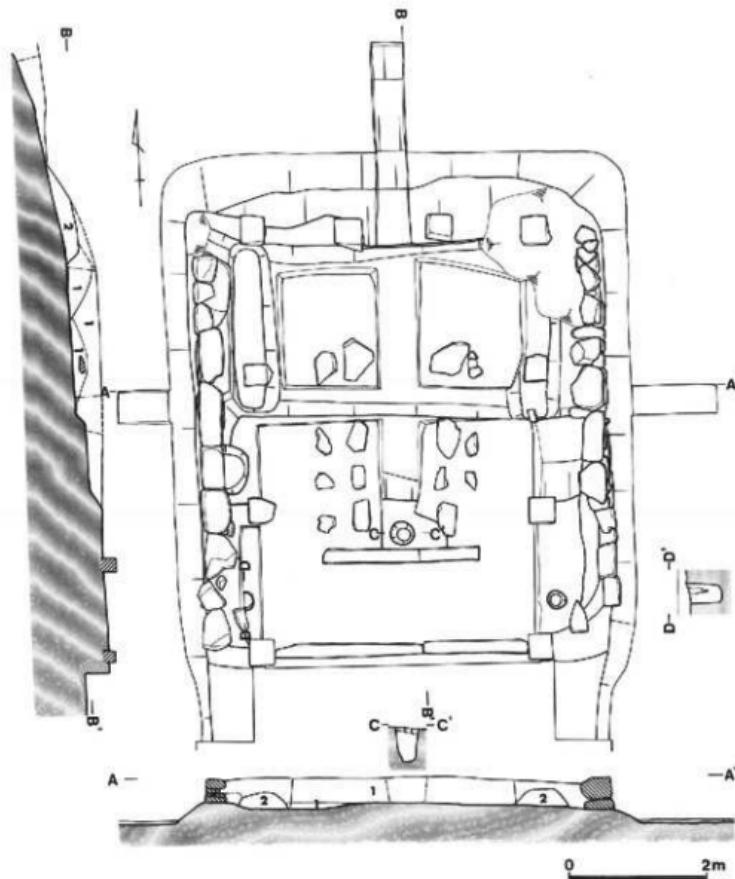


fig. 27-4. 昭和61年度調査（本殿）遺構平面・断面図

**2. 調査の概要** 調査を行ったのは、本殿の東の消火管理設部分（第1トレンチ）と既設防火水槽の北側、受水槽設置予定部分（第2トレンチ）の2カ所である。

**第1トレンチ** 本殿のある平坦面は尾根を切り込んで造成されているが、第1トレンチでは本殿建立の際の整地の状況を観察することができた。表土から寛永通宝1枚が出土した。

**第2トレンチ** 遺構、遺物は検出されなかった。

## 28. 宅原遺跡

### I. はじめに

昭和58年より北区長尾町において、県営圃場整備事業が始まり、それに伴い埋蔵文化財の発掘調査も同年より開始した。昭和62年度は、長尾町宅原の岡地区と豊浦地区で事業が計画され、それに先立って、水田造成による削平部分及び、排水路、パイプライン、道路等によって遺物包含層・遺構面の削られる部分について発掘調査を行った。

また、北神ニュータウン建設関連の長野川改修工事に伴い、前の坊・西豊浦・竹ヶ越地区においても発掘調査を行った。



fig 28-1. 調査地位置図

## II. 豊浦地区

### 1. 調査の概要

長尾川右岸の丘陵から長尾川に向かって数本の尾根が延びている。豊浦地区はその尾根先端の低位段丘上に存在する。

**第1トレンチ** 第1トレンチからは、上坑7基と、ピット9ヵ所が見つかっている。S K01は、直徑60cm・深さ25cmのほぼ円形の土坑である。S K02からS K07までは全て調査区外に広がっているため、大きさや形状は不明である。深さは80cm前後のものが多く、数基が接した形で掘られている。ピットは並ぶものはないが、柱痕が明確なものもありこの付近に掘立柱建物の存在する可能性もある。

**第5・15トレンチ** この調査区からは、古代から中世前半までの大溝2条と中世前半の掘立柱建物・井戸・木棺墓・溝・土坑・ピットと近世のピット・溝等が検出された。

**S B01** S B01は南北4間・東西2間以上の掘立柱建物である。全体の大きさは建物が調査区の西側に延びるため不明である。柱穴の掘形の直徑は35~45cm柱痕の大きさは15~20cmである。検出された柱穴の深さは10~15cmと浅く、上面は削平されていると考えられる。南北方向の柱列は、N 4°Wを測る。

**S B02** 南北6間・東西3間以上の掘立柱建物である。全体の大きさはS B01と同様に調査区の西側に建物が延びるため不明である。掘形の直徑は35~45cm、柱痕の直径は20~25cmである。柱穴の深さは10~15cmと深い。検出された柱穴は外堀のみであるが、後世の削平を受けているため、総柱の建物の可能性もある。南北方向の柱列は、N 5°Eを測る。

S B01とS B02は、柱穴内より出土した遺物より、両者共12世紀後半から13世紀前半の建物と考えられる。S B01とS B02は重複するが、その前後関係は不明である。また、この2つの建物の周辺は、耕土直下で地山が顯れて遺物包含層が存在せず、またどの柱穴も浅く、削平されて検出されない柱穴もあった。このため、調査区西半は、東半より本来は一段高く、その上に建物が建っていたと考えられる。

**SD04~SD10  
ピット群** 調査区の東半では多数のピットと溝が7条検出された。溝はいずれも5cm~20cmと浅く、断面は浅いU字形をしている。ピットはかなり密集して存在する。柱痕もはっきり確認できるものも多数ある。ピットの多さや、溝の切り合いなどから、数時期の掘立柱建物が存在するものと思われるが、建物としてまとまるものは見つけられず、今後の検討を要する。建物の時期は、ピット内の遺物より、12世紀前半から13世紀代にかけてのものと考えられる。



fig. 28-2. 第15トレンチ平面図



fig. 28-3. 第15トレンチ全景



fig. 28-4. SB01・02



fig. 28-5. ST01・SD18

## 土器群01

調査区の東端で、12世紀前半の須恵器の塊・小皿・土師器の小皿がまとめて出土した。これらの遺物は遺構に伴わず、遺構面の上面に1.2m×2.8mの範囲で出土した。特に須恵器の小皿の割合が多いのが目立つ。

## S T01

調査区北半のS D15とS D18の間に木棺墓S T01が存在する。掘形の大きさは80cm×200cmの隅丸長方形で、現存する深さは40cmである。長辺は、ほぼ東西方向に向けられている。木棺はその痕跡のみ検出された。形状は50cm×154cmの長方形である。痕跡から、側板は底板の横に、木口板は底板の上に置く形の箱形の木棺であると考えられる。埋土の状態より、天板と南側板から崩壊したと考えられる。人骨は検出されなかったが、棺内中央部南側板横から刀子が1本出土している。刀子は切っ先を東に向けて置かれていた。すでにかなり腐食しており、形状は明らかでないが、残存長は32cmである。この刀子の他に遺物は全く出土せず、この墓の造られた時期の確定はできないが、宅原遺跡内で12~13世紀の同様の木棺墓が数基発見されており、この墓址も、この調査区の遺構と同時期の12~13世紀のものと考えられる。

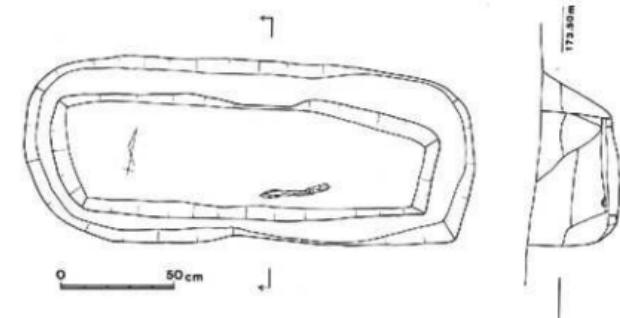


fig. 28-6.  
S T01平面・断面図



fig. 28-7.  
S T01

S E 01

第15トレーナのほぼ中央東寄りで見つかった井戸である。前述のピット群の北に位置する。この井戸の残存度は良好で、井側材がかなり良好な形で残っていた。

井戸の掘形の形状は上面で直径3.1mの円形、底で一辺1.3mの隅丸方形をしており深さは3.1mである。井戸底の標高は171.2mで、湧水層の標高は171.6mである。

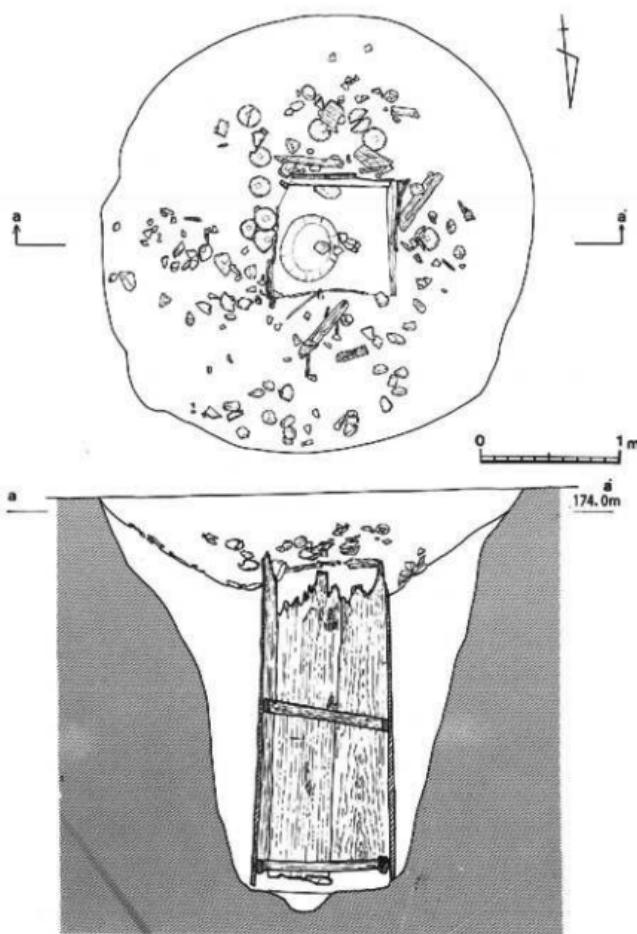


fig. 28-8. S E 01平面・断面図

井側は一辺1.0mの方形で、一辺に3枚の縦板を置き、中央と底に横桟を渡して組み合わせた横桟縦板形の井側である。縦板は底より2.1mの所まで残存し、それより上は腐食している。井側は、掘形の底より直接組まれており、曲物等の井筒は存在せず、掘形の中央部に直径55cm・深さ15cmの浅い凹みを作っているだけである。

井側内と掘形内により、多数の遺物が出土した。井側内の埋土からは多数の須恵器塊・小皿・土師器の皿・小皿・塊等の土器類が出土している。このうち須恵器の塊・小皿には、その外面に「有田」「中口」「き」と書かれた墨書き器が含まれる。これらの土器類の他に、鉄鏃・多数の木製品・種子類・木片・葉・竹筒・竹製編み物・鹿角等が出土している。木製品には呪符木簡・砧・下駄・箸・陽物形・刀子形・手斧形・毬・札・板・棒・杭等の他に用途不明の木製品や、曲物の一部が出土している。

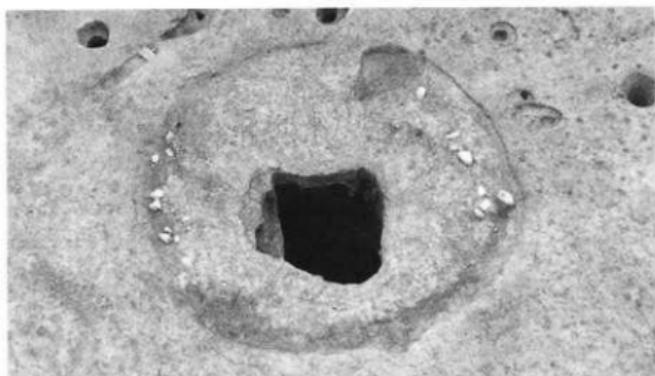


fig. 28-9.  
S E 01



fig. 28-10.  
S T 01掘形  
遺物出土状況

呪符木筒は、底から45cmのところから出土している。木筒の大きさは幅4.6~5.2cm、残存長65cm、厚さ0.3~0.8cmの大型のものである。表面には「吐吠噏」より初まり「急々如律令」で終わる42文字と鬼の目、顔等や符録が画かれている。この木筒は、井戸を埋める際（あるいは廃棄する際）のまじないに使われたと考えられる。

種子類は梅の種が多く、その他、桃と瓜科の種子が出土している。葉は、柿の葉が一枚出土している。

掘形内では、最下層で角材が井側材の裏に平行して三方から出土している。土器類は掘形を最終的に埋める直前の層で須恵器の壺・小皿・土師器の皿・小皿・瓦器壺等が置かれた状態で多数出土している。これらの土器は、掘形を埋める際に、何らかの祭祀を行った時のものと考えられ、須恵器の壺と瓦器壺に、呪字あるいは花押と思われる墨書が3点見つかっている。また、掘形内からも梅の種が見つかっている。



fig.28-11. S E01井側内遺物出土状況①



fig.28-12. S E01井側内遺物出土状況②

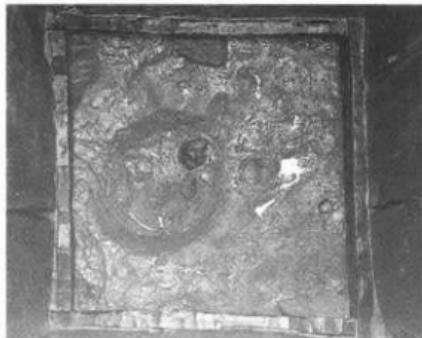


fig.28-13. S E01井側底

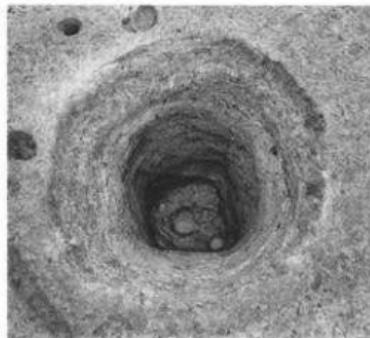


fig.28-14. S E01掘形全掘状況

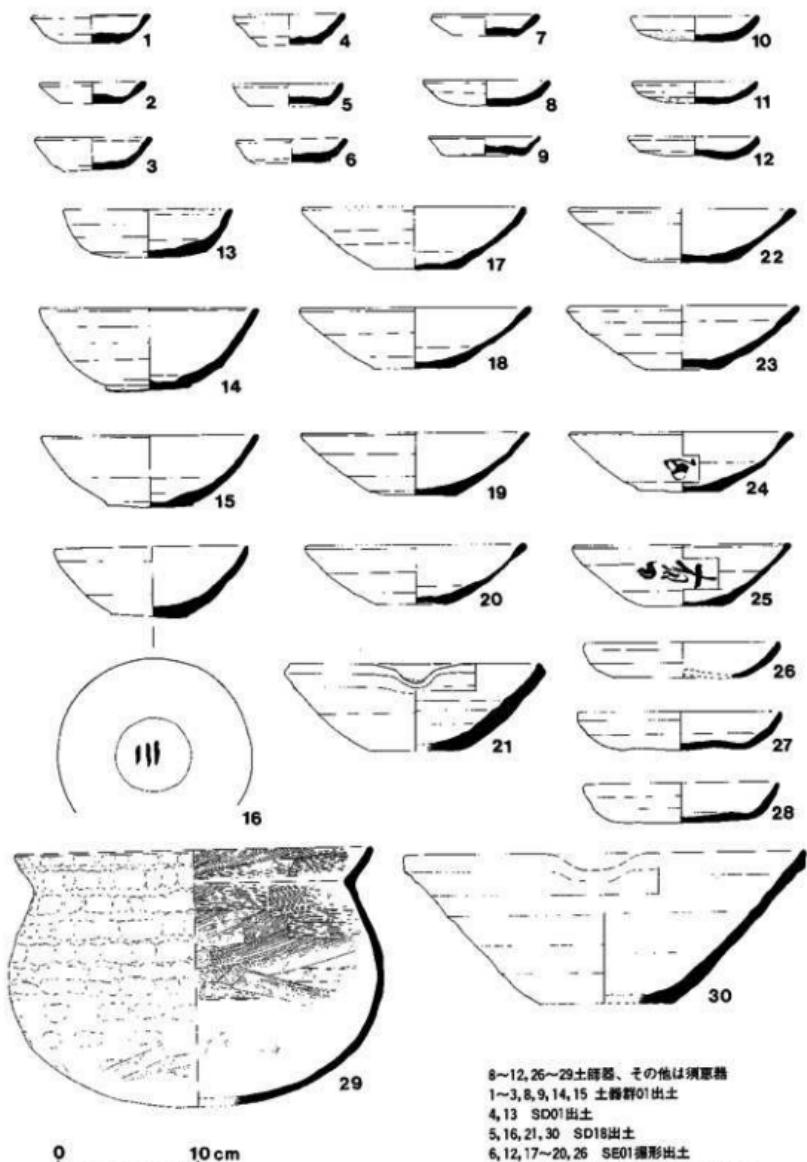


Fig.28-15. 第15トレンチ遺物実測図

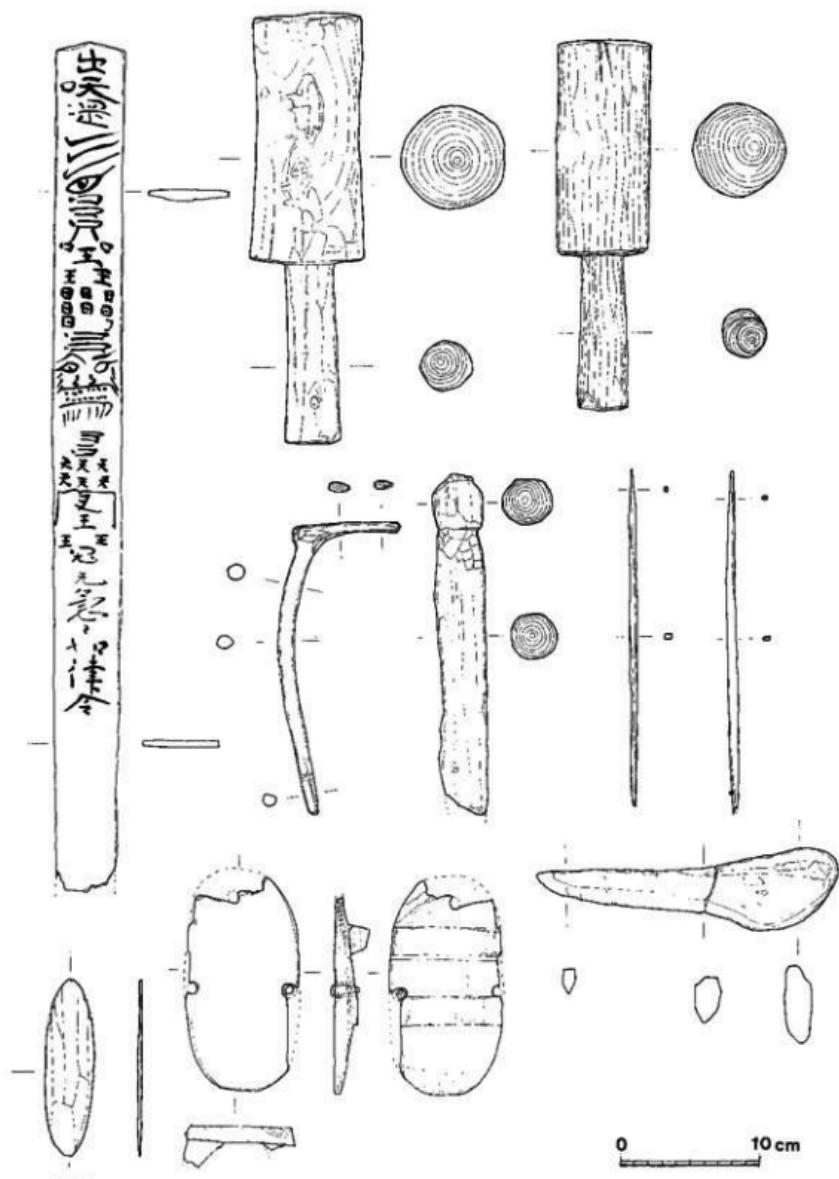


fig 28-16. 第15トレンチ S I:01内木製品実測図

S D01

S D01とS D18は、調査区内の南端と北端を西から東へ横切る大溝である。

S D01は幅約18m・深さ2m以上の溝である。北側は幅7~9mの、2段の平坦面が造られているが、南側の立ち上がりには、そのような平坦面は造られていない。

標高173.10m以下は工事影響レベル下にあるため完掘はせず、幅1mで断ち割り調査を行った

最下層は砂疊層で、無遺物である。その直上の暗灰色粘土層より上は、この溝の最終埋土の灰褐色粘土層まで全て水平に堆積した粘土、ないしはシルト層であるため、この溝はゆるやかな流れか、水が流れた状態で、序々に埋まっていたものと考えられる。また最下層が砂疊層で無遺物であることから、本来自然の谷地形であったものを、人の手を加えて形を整えたものと考えられる。その時期は、砂疊層直上の暗灰色粘土層より出土した遺物より7世紀中頃以降と考えられる。この溝が最終的に埋まったのは、最上層中の遺物より13世紀前半のことと考えられる。

このS D01からは須恵器の壺・坏蓋・境・小皿・片口鉢や土師器の皿・塊、青磁・白磁の碗等の土器類や砥石・杭や木片等が出土している。特に12~13世紀代の須恵器の境には、「有田」「中西」「小西」等の文字や「○」「×」等の記号の書かれた墨書き器が、破片もふくめて百数十点出土している。また、これらの土器の他に、炉壁もしくは焼型と思われるものの破片が、12世紀~13世紀の土器と共に多く出土している。S D18においても同様の破片が多く出土しており、付近に、鍛冶あるいは鋳造の施設が存在したものと考えられるが、今回の調査ではその遺構は確認されなかった。



fig. 28-17.  
S D01

## SD18

SD18は、第15トレンチの北端から、第5トレンチにかけて検出された大溝である。第15トレンチでは、南側の肩しか検出されず、北側の肩は第5トレンチ内で納まると考えられるが、第5トレンチでは、工事影響レベル以下にこの溝の検出面があるため、北側の肩は検出できなかった。また15トレンチ内で、工事影響レベル以下を一部断ち割りしたが、トレンチ内では最深部までは達せず、第5トレンチ内に最深部があるようである。このため、SD18の幅、深さは確認できなかった。ただし、第9・13・14トレンチでこの溝の続縫が検出され、そこでの状況も考え合わせると、この付近では幅9m前後と推定され、SD01と同様に本来谷地形であったものを7世紀後半以降に整形し、その後序々に埋まってSD01と同時期に完全に埋まったと考えられる。SD18からは、須恵器の壺、小皿、片口鉢、土師器の壺、羽釜等の上器類と、前述のSD01で出土したものと同様の炉壁あるいは鋳型の破片が多数出土している。また、須恵器の壺にはSD01と同様の文字の他、器底に「川」と書かれた墨書き土器も出土している。

## SD15～SD17

調査区の北端近くで見つかった溝でSD15が、SD16とSD17に分かれている。SD15は幅130cm・深さ20～25cmで断面U字形をしている。この付近はピットが少なく、このすぐ北に木棺墓(ST01)が作られて、その北側が前述のSD18である。このことよりこれらの溝は、居住地を画する溝と考えられる。

## 近世の遺構

第15トレンチ北端と第5トレンチにかけて、18世紀以降のピット列と溝(SD19)が検出された。ピット列は8ヵ所のピットがトレンチ内ではほぼ1.9～2.0m間隔で直線に並ぶ。ピットの大きさは直径30cm・深さは20cmである。SD19は幅40cm・深さ25cmの溝で伊万里焼の染付片が出上している。その他第15トレンチ内では、SD03・SD12が近世の溝である。

遺物包含層  
の 遺 物

遺物包含層からは、多数の中世の須恵器・土師器・青磁・白磁片と共に、6世紀代の环身片・7世紀の环身片・滑石製有孔円盤が出土している。これらの遺物に伴う遺構は、今回の調査では見つかなかったが、付近に古墳時代の遺構の存在も予想される。

また、サヌカイトやチャートの剥片も数点出土しているが、弥生・織文土器片は全くみられない。

## 第7トレンチ

このトレンチ内からは溝2条とピット11ヵ所が検出された。ピットは、4ヵ所が一列に並び、柱痕もはっきり確認されており、掘立柱建物の一部である可能性がある。ピットの掘形の大きさは、直径35cm・深さ30cm・柱痕は直径15cmで、ピットの間隔は2.0mである。出土遺物より13世紀の遺構と考えられる。

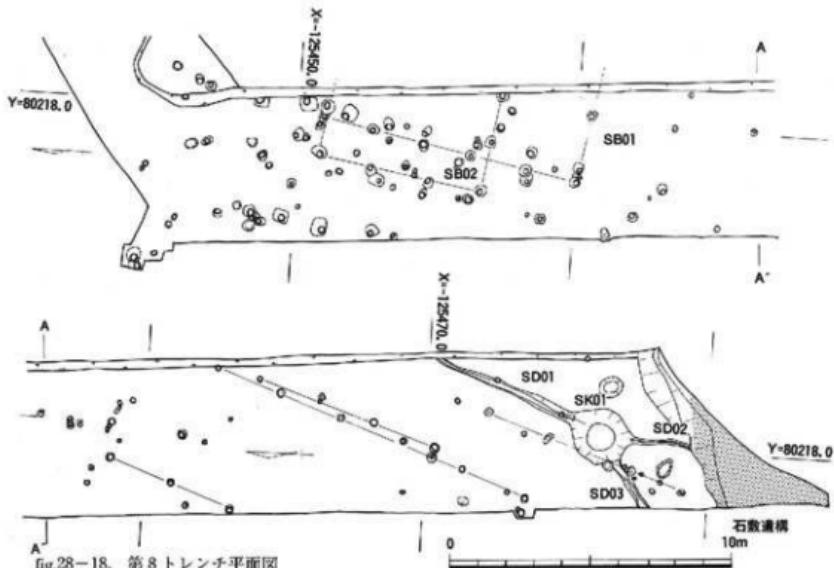


fig.28-18. 第8トレンチ平面図

**第8トレンチ** 第8トレンチからは、9世紀前半の掘立柱建物・ピット、12世紀後半から13世紀初頭にかけてのピット・溝・土坑、15世紀から16世紀にかけての石敷遺構等が検出されている。

トレンチ北半において、9世紀前半と考えられるピットが多数検出された。このうち2棟の掘立柱建物は認められるが、その他のピットは、約5m幅のトレンチ内では建物として確定できなかった。ただし、数ヶ所が並んでいるピットが多数見られるので、この付近に数棟の建物が、数回建て替えられて存在していたと考えられる。

**S B01** S B01は5間×2間以上の掘立柱建物である。東西方向は建物が調査区の東側に延びるため規模は明らかでない。南北の柱軸の方位はN 10°Wである。掘形の大きさは30~40cm、深さは25~30cm、柱痕の大きさは直径15~20cmである。柱間は南北が1.8m、東西が1.8~2.0mである。

**S B02** S B02は南北4間・東西2間以上の掘立柱建物である。この建物もS B01と同様にトレンチの東側に延びるため全体の規模はわからない。南北方向の軸方向はN 8°Eである。掘形の直径は30~50cm・深さ30~40cm・柱痕は直径15~20cmである。柱間の長さは南北方向が1.9~2.1m・東西方向が1.8mである。

以上2つの建物は、ピット内より出土した遺物より8世紀末から9世紀前半のものと考えられる。

中世前半の遺構としては柵列3本と溝3条、土坑3基が検出された。これらの遺構は、主にトレーナーの南半に存在する。

**S D01～S D03** S D01は北東から南西方向に流れる幅15～25cm、深さ5cmの浅い溝で、SK01に流れ込む。S D02, 03はSK01より南西方向に流れ出している溝で幅20cm・深さ5cmを測る。

**SK01** SK01は上面で直径1.9m・底で直径1.0m・深さ0.45mの摺鉢状の土坑である。SK01内からは須恵器の壇・土師器の小皿・砥石が出土している。これらの形状と、SK01の埋没状態からこの溝と土坑は、生活排水施設と汚水留めと考えられる。

**柵列** SA01～04まで4条の柵列が確認された。これらのピット列はSD01～03にはほぼ並行して並んでいる。

以上の溝、土坑、柵列は、出土した遺物より12世紀後半のものと考えられる。

**石敷遺構** トレーナー南端において石敷遺構(SX01)が検出された。このSX01は遺構検出面から約30～70cm掘り下げ、その底と斜面の一部に直径約2cmから約20cmぐらいの石を敷いている。南と東は、水田と水路によってすでに削られて消滅している。

石敷のある窪みは常時湛水していたらしく、石敷の上には、粘土～シルトが堆積している。この粘土層から、丹波焼の摺鉢片や瓦片が出土している。これらの土器は小片のため時期の確定は難しいが、15～16世紀代のものと考えられる。

**遺物包含層出土の遺物** 第8トレーナーの遺物包含層からは、8世紀から9世紀にかけての須恵器の壇身、壇蓋の他に灰釉陶器片や綠釉陶器片が出土している。また、12世紀代の須恵器片、土師器片、青磁、白磁片の他に、北宋銭が「元豊通宝」他3枚出土している。



fig. 28-19. 第8トレーナー全景



fig. 28-20. 石敷遺構

## 第9トレンチ

SD01

第9トレンチからは、溝1条（SD01）がトレンチ内を横切って検出された。この溝は、前述の第15トレンチ SD18の続きである。第9トレンチにおいては、幅12m・深さ2.4mで、断面はゆるやかなV字形を呈している。この溝の最下層は無遺物であるが、底より80cm上の灰色粘土層から、7世紀後半から8世紀にかけての須恵器の坏身・坏蓋・壺等が出土している。埋土の最上層は13世紀頃の遺物を含み、この時期に完全に埋没している。出土遺物のうち、前述の灰色粘土層より、8世紀代の須恵器坏蓋の破片の内面に、「五十戸」と書かれた墨書き土器が出土地する。この「五十戸」は、律令制下における地方の行政単位である、「五十戸」＝「里（郷）」を表している。

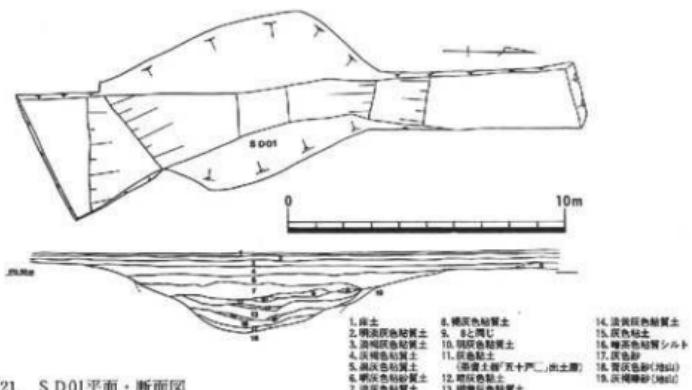


fig. 28-21. SD01平面・断面図



fig. 28-22. SD01断面

**第10トレンチ** 第10トレンチでも、8トレンチとほぼ同時期の9世紀代のピット群・掘立柱建物、12世紀のピットが検出された。

9世紀のピット・掘立柱建物は主にトレンチの中央部から西半に集中している。

**S B01** S B01は、東西5間×南北1間以上の掘立柱建物で、トレンチ外の西北側に延びるため全体の形状は不明である。掘形の大きさは、直径25~30cm・深さ20~40cm・柱痕は直径20cmである。柱間は東西が2.3~2.4m・南北が2.2mである。

**S B02** 東南3間・南北1間以上の掘立柱建物であるが、南側はトレンチの外に延びる。柱穴の掘形の直径は30~50cm・深さ25~50cm・柱痕の直径は25cmを測る。柱間は東西2.4~2.6m・南北2.1~2.6mである。

この建物の北辺に、須恵器の甕の胴部の破片を、礎盤として利用している柱穴が存在した。

これらの第10トレンチS B01・S B02は、第8トレンチS B01・S B02とほぼ同じ棟方向に建っている。

**第11トレンチ** 第11トレンチではピットが数ヵ所検出された。しかし、いずれも散在的で、まとまって建物跡や、柵列になるものはない。遺物包含層からは中世前半の遺物が出土しており、この時期のピットと考えられる。

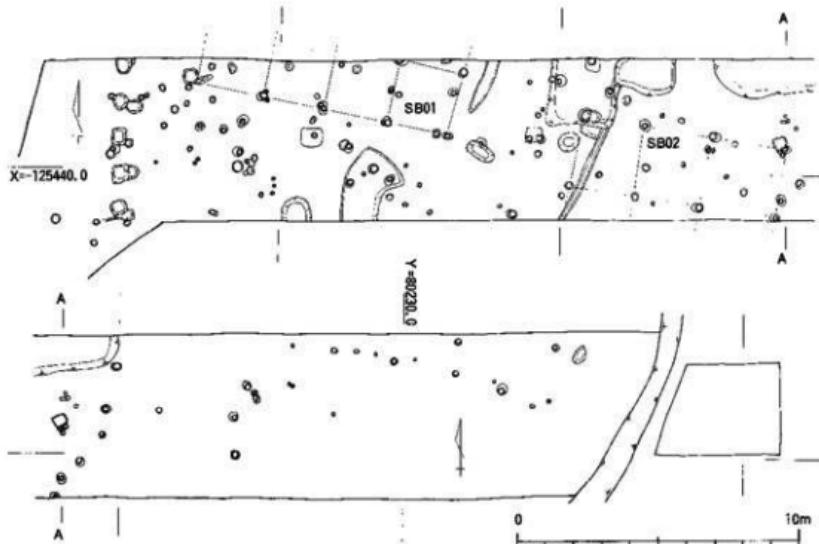


fig.28-23. 第10トレンチ平面図



fig. 28-24. 第10トレンチ全景

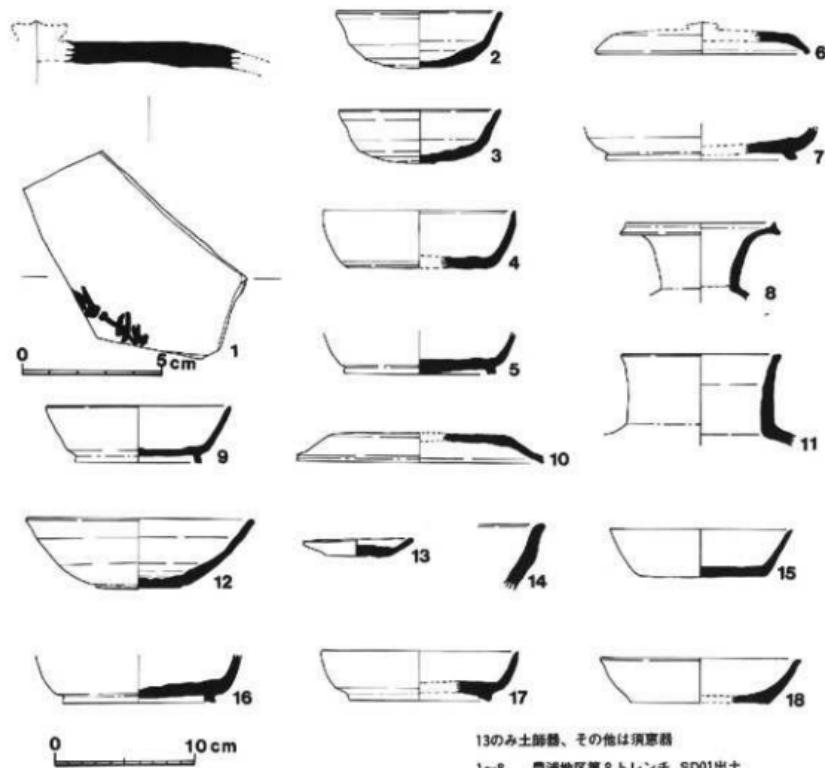


fig.28-25. 第8～10トレンチ遺物実測図

- 13のみ土師器、その他は須恵器
- 1～8 豊浦地区第8トレンチ SD01出土
- 9～11 豊浦地区第8トレンチ ピット、包含層出土
- 12～14 豊浦地区第8トレンチ SK01出土
- 15 豊浦地区第10トレンチ ピット出土
- 16～18 豊浦地区第10トレンチ 包含層出土

### III. 宮ノ元地区

**1. 調査の概要** 宮ノ元地区は、豊浦地区の東側にある尾根先端部の段丘上と、その付近に立地する。

**第1トレンチ** 遺構は検出されなかったが、遺物包含層からは8世紀から13世紀の須恵器片、土師器片が出土した。

**第2トレンチ** 第2トレンチは3つの地区に分けられ、東からa区、b区、c区と名付けた。

a区は第1トレンチの続きで、遺構も浅いピットが9ヵ所検出されたのみである。しかし、遺物は、第1トレンチと同様に、遺物包含層から須恵器、土師器等が出土している。

b区は、段丘の先端部で、遺構は全く存在しなかったが、遺物包含層からは須恵器片、土師器片が出土した。特に7、8世紀代の須恵器は破片の大きなものも存在し、後述の第4トレンチの遺構より流れて来たものと考えられる。

c区では、道路下に付設されるパイプライン部分のみ深く下げ、それ以外は、工事影響レベルまで遺物包含層を掘削したのみである。

この1m幅のパイプライン付設部分において自然流路と、溝1条、土坑1基が確認された。自然流路は、幅4m・深さ0.6mで、埋土中より8世紀の須恵器が出土している。土坑は、調査区外に広がるため全体の形状は明確ではないが幅1.4m・長さ2m・深さ0.4m程度の舟底形の土坑のようである。溝は幅0.5m・深さ0.2mである。

両方の遺構とも時期を確定する遺物は出土していないが、直上の遺物包含層からは中世前半の遺物が出土しているので、その時期の遺構と考えられる。

**第3トレンチ** ピットが1ヵ所検出されたのみであるが、遺物包含層からは、6世紀末～7世紀初頭・8世紀代・12～13世紀代の遺物が出土しており、次に述べる第4トレンチ付近より流れて来たものと考えられる。

**第4トレンチ** この調査区からは、6世紀末～7世紀初頭の堅穴住居2棟、8世紀代のピット、12世紀～13世紀のピット・溝・木棺墓と3時期の遺構が確認されている。

S B01とS B02は方形の堅穴住居であるが、両住居とも、後世にその殆どが削り取られ全体の規模等を明らかにすることはできない。

**S B01** S B01は、コーナー付近で深さ30cmを測る。残っている範囲内では周壁溝を設けている。柱穴はコーナーから1.2m離れたほぼ対角線上にある。

のことから4本柱の建物と考えられる。

S B02 S B02は、S B01に切られており、残存部分が少なく、柱穴は確認されなかった。周壁溝は検出された。

S K01 S B01とS B02の間に焼土坑(S K01)が存在する。この3つの遺構は、その切り合いから、古い順にS B02→S K01→S B01という前後関係になる。遺物はS B01の埋土中より、6世紀末から7世紀初頭の須恵器、土師器が出土しており、また付近の包含層からも、ほぼ同時期の遺物が出土している。のことから、この時期の竪穴住居であると考えられる。また、S B02・S K01からは、遺物が出土していないため時期は確定できないが、遺物包含層や周囲の調査区からも6世紀末以前の遺物は出土していないことから、S B01の時期からさほど遡った時期ではないと考えられる。

柱穴 第4トレンチ西半北端においては、一辺約50cmの隅丸方形の掘形を持つ柱穴が5基検出された。そのうち4基はほぼ一列に並ぶが、北側は削平されているため、対応する柱穴は見あたらなかった。掘形の深さは30cm~40cmで、柱痕は直径30cmである。

一列しか検出されなかつたが、掘形の大きさから、掘立柱建物の一部であると考えられる。遺物は柱穴からは出土しなかつたが、第4トレンチの遺物包含層や、そのすぐ北の第2トレンチの遺物包含層から、8世紀代の須恵器が多量に出土した。柱穴の形状から、その時期の柱穴であると考えられる。

S T01 中世の遺構は、溝6条と木棺墓1基、ピットが検出されている。木棺墓は掘形の大きさが $1.6m \times 0.9m$ 、木棺の痕跡の大きさは $1.1m \times 0.5m$ である。遺物は全く出土しなかつた。このような木棺墓は宅原遺跡内において、蓮華寺地区・岡下地区・有井地区・豊浦地区で中世前半の木棺墓が見つかっていることから、この木棺墓も中世前半期のものと考えられる。

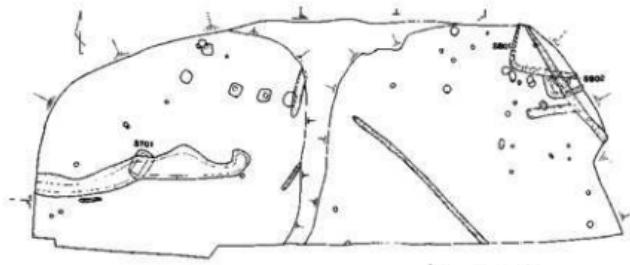


fig. 28-26.  
第4トレンチ平面図



fig.28-27. 第4トレンチ西側造構検出状況



fig.28-28. S B01・02・SK01

**第5トレンチ** 第5トレンチでは、ピットが4ヵ所検出されたのみである。遺物も現水田の盛土内より中世の須恵器が数点出土したのみである。

**第6トレンチ** 宮ノ元地区の尾根西側縁辺付近のトレンチである。このトレンチは工事影響レベルが遺物包含層内で納まるため、一旦その高さで調査を止め、その後遺物包含層の厚さ、下層における遺構の有無を確認するために断ち割り調査を実施した。その結果、遺構検出層上面で鉄斧が2本出土し、土坑1基と溝1条を確認した。それぞれ工事影響レベル下であるため、プランを確認したのみで、深さ・遺物の有無は不明である。土坑は、 $1.5\text{m} \times 1.2\text{m}$  の楕円形の土坑で、プラン検出面では炭を多く含んでいる。溝は幅30cmである。このように、遺構は検出されたが、その時期の確定はできず、また2本の鉄斧も遺構面上で出土したため、時期は不明である。しかし、遺物包含層からは中世前半の遺物が出土しており、その時期のものと考えられる。

**第7トレンチ** 低位段丘の先端縁辺に位置する。宮ノ元地区と豊浦地区の間に入る谷の沖積地で、本来湿地であったと考えられ、遺物もまばらで、遺構もピットが7ヵ所検出されたのみである。ピットから遺物は出土せず、遺物包含層のわずかな土器片から、中世前半の遺構と考えられる。

**第8トレンチ** 第7トレンチとほぼ同じ沖積地で、遺構は検出されなかった。遺物も須恵器と土師器の小片が数点出土したのみである。

**第9トレンチ** 遺物、遺構は確認されなかった。

**第10トレンチ** このトレンチでは、南半に遺構が集中し、北半は耕地造成時に削平を受けたものと思われ、遺物包含層、遺構は存在しなかった。南半では、掘立柱建物2棟と多数のピット・溝・土坑等が検出されている。

**SB01** 2間×3間の掘立柱建物である。北側にもう半間分の柱列があるが、北側であることから廂とは考えられず、その構造は不明である。掘形は、1辺約50cmの方形のものが多く、掘形の深さは10~20cmである。柱痕の直径は30cmである。柱穴掘形内より出土した遺物より、9世紀前半の建物と考えられる。

**SB02** 3間×4間の掘立柱建物で、南側に1間分の廂または、縁側を持つ縦柱の掘立柱建物である。柱穴の掘形の直径は30~40cm・深さ20~40cm・柱痕の直径は20cmを測る。北側と西側に、幅35cm・深さ10cmの雨落ち溝（SD01）が存在する。また建物内の北東と北西と南東の隅に浅い土坑（SK01~03）が掘られている。その内SK03は炭がつまっている。柱穴内の出土遺物よりSB02は、12世紀前半の建物と考えられる。

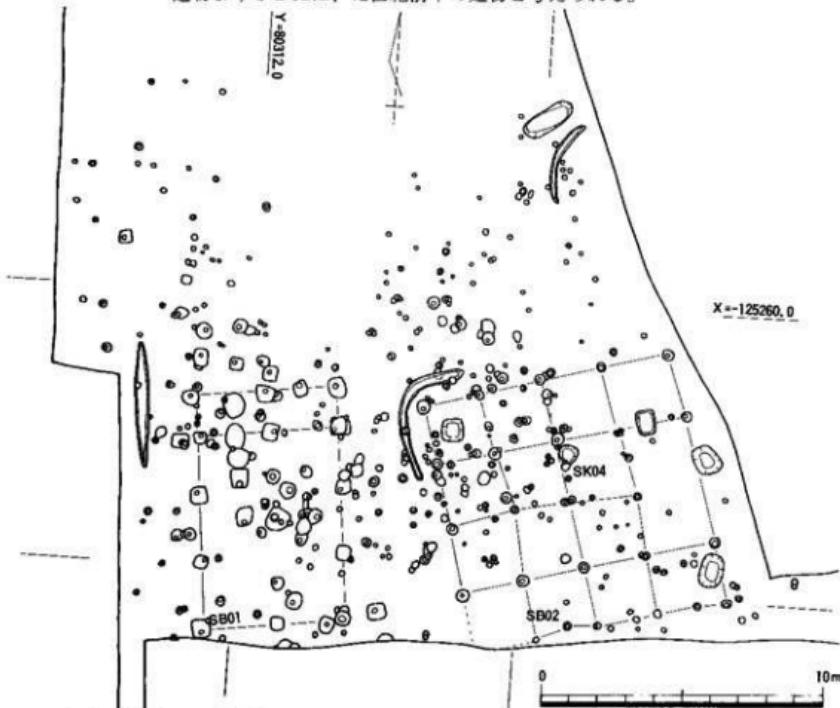


fig.28-29. 第10トレンチ平面図



fig. 28-30.  
10 トレンチ全景



fig. 28-31.  
S B01



fig. 28-32.  
S B02

**柱穴群** 第10トレンチでは、S B 01・02の柱穴の他に多数の柱穴と考えられるピットが存在する。現在、遺物・図面等整理作業中のため建物としてまとまるものは未確認である。出土遺物は、7～10世紀および12～13世紀と、かなり時期幅を持っており、7世紀頃から断続的にこの地に建物が建てられたと考えられる。

**S K 04** 長径70cm・短径50cm・深さ10cmの土坑である。柱穴群中に存在し、建物に伴う施設である可能性が考えられるが、現時点ではその性格は明確にできない。土坑内より、横瓶の上半部が出土した。

S K 04以外にも同様の規模の土坑が存在するが、建物との関連を明確にできるものはない。

**第11トレンチ** 第11トレンチでは、耕土直下でピットが3ヵ所検出された。かなり削平を受けていると考えられ、どれも浅い。第10トレンチで検出された建物等のピット群の続きである。

**第12トレンチ** 第12トレンチは東からa～c区に分かれる。a区では遺構は存在しなかった。但し、遺物包含層から8世紀の須恵器壊が出土している。

**柱穴** b区ではピットが11ヵ所検出された。そのうちpit8は一辺約50cmの隅丸方形の掘形の中に直径25cmの柱痕をもつ柱穴である。柱痕の深さは30cm・掘形の深さは55cmである。

柱穴内より須恵器鉢が出土し、掘形の下層からは、須恵器壊身2点、土師器高壊等が出土している。この掘形下層の遺物は、柱痕の下から出土しており、地鎮祭に使用された土器であると思われる。遺物の時期は6世紀末から7世紀初頭と考えられる。

c区からは、ピットが3ヵ所検出されたのみで、第10トレンチにくらべると遺構の検出数は非常に少ない。

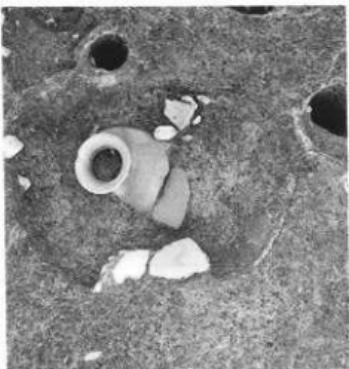


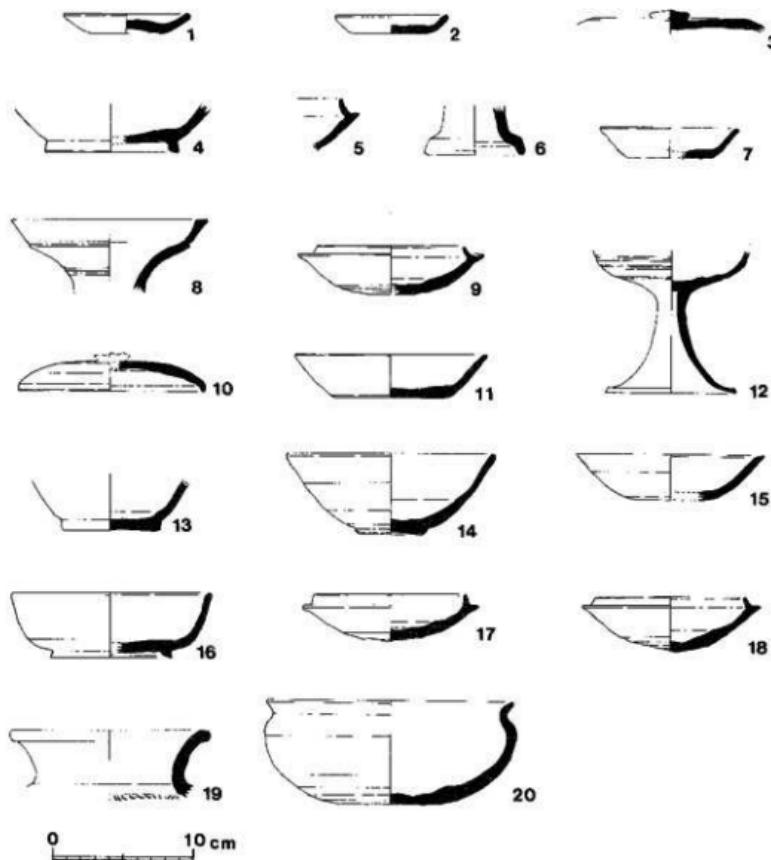
fig. 28-33. S K 04横瓶出土状況



fig. 28-34. Pit 8 柱穴内遺物出土状況

## 第13トレンチ

このトレンチは、谷の沖積地に位置する。そのため、谷地形に堆積した灰色粘土ーセルトの層のみで遺構は認められない。しかし、同層中より7世紀より13世紀にかけての多量の須恵器が出土した。これらの土器は、破片が比較的大きく、磨滅も少ないとから、すぐ横の段丘上に遺構の存在が予想される。



1.は土器器 その他は須恵器

- |                 |                      |
|-----------------|----------------------|
| 1~5 第2トレンチ 包含層  | 10~15 第2トレンチ 柱穴内出土   |
| 6,7 第4トレンチ 包含層  | 16 第12トレンチ 包含層出土     |
| 8,9 第4トレンチ SB01 | 17~20 第12トレンチ p108出土 |

fig.28-35. 遺物実測図

## 2. まとめ

今回の調査では7世紀後半から13世紀にかけての遺構が確認された。

宮ノ元地区第4トレンチでは、6世紀末から7世紀初頭の堅穴住居が検出され、第12トレンチでは、同時期の掘立柱建物の一部と思われる掘形の大きい柱穴が見つかっている。

また、7世紀後半の大溝が豊浦地区第15トレンチ S D01と豊浦地区第15トレンチ S D18～豊浦地区第9トレンチ S D01の2条が検出された。この溝は両方共7世紀中頃に掘削され、13世紀前半頃にはほぼ埋没しており、同じような埋没状況を示している。7世紀代の大溝は、同じ宅原遺跡内において岡下地区や宮ノ元地区でも見つかっており、岡下地区では「評」の文字の書かれた墨書き土器、宮ノ元地区では日本最古の木製面や馬骨などが出士している。

また8世紀の掘立柱建物と思われる柱穴列が、宮ノ元地区第4トレンチで、9世紀前半の掘立柱建物が、豊浦・宮ノ元両地区から検出された。豊浦地区的掘立柱建物の付近からは、灰釉・綠釉陶器片が出土している。8世紀から9世紀にかけての律令制下における建物は、同じ宅原遺跡の辻垣内地区・岡下地区でも見つかっている。

豊浦地区第9トレンチ S D01では、「五十戸」と書かれた墨書き土器が出土している。以上のような状況から7世紀後半から9世紀までの律令制下において、当地域に評衛あるいは里衛（郷衛）として地方行政の末端組織の官衛が存在したと考えられる。

9世紀後半から11世紀にかけては、律令制も解体し、時代が中世に変わると、特に末端の地方官衛はいち早く、その機能を失ったと考えられる。そして、荘園制が広く一般的になる11世紀後半から12世紀にかけて、この地域も荘園として再編成されたと考えられる。『山城国三鈴寺文書』に、三鈴寺領として「宅原荘」の文字が見られるのも、このような状況下からである。

その頃の遺構として、今回は12世紀後半から13世紀にかけての掘立柱建物と井戸、墓などが見つかり、当時の荘園内の民衆の生活の一端を知ることができた。特に豊浦地区第15トレンチの大溝（S D01）からは多量の墨書き土器が出土し、また同じく井戸（S E01）からは当時の木製品の出土などから、中世人の精神生活や日常生活の一部を垣間見ることができた。

このように、宅原遺跡の南半丘陵地区は、これまでの調査と考え合わせても、7世紀後半以降の地方における集落の変遷を知る上で、貴重な遺跡である。

まほのばう にじとうようら たけがこし  
IV. 前の坊地区 西豊浦地区 竹ヶ越地区

### 1. 調査の概要

当該調査地付近は、土地改良事業に伴う分布、試掘調査等によって埋蔵文化財の存在が明らかになっていた。

調査地の上流部にあたる丘陵が、住宅都市整備公団の進めている北神3町地の造成計画の範囲内にあり、排水等の施設の整備のため河川改修を行う必要が生じた。

昭和61年度に遺跡の規模、範囲等を確認する目的で、当該地の試掘調査を実施したところ、平安時代～中世の柱穴等が確認された。このため、今年度に約1550m<sup>2</sup>について緊急発掘調査を実施した。

今回の調査地は、長野川の両岸を地形上の都合により、北からⅠ～Ⅲ区に分けて調査を実施した。

また、川をはさんで宅原と上津地区という二つの村落の境界となり小字名も異なるため、それぞれを下記のように命名した。

Ⅰ区→宅原遺跡 前の坊地区

Ⅱ区→宅原遺跡 西豊浦地区

Ⅲ区→上津遺跡 竹ヶ越地区



fig.28-36. 調査地位置図



fig.28-37. 調査地全景

I区

地形上、上下二段に分けることができ、上段をI-A区、下段をI-B区とした。

I-A区ではピット、土坑等を確認したが、水田造成時に削平を受けており遺構の深さは、0.1m～0.2m程度しか残存していない。

遺構からは土器は出土していないが、上層の堆積土からは平安～室町時代の土器の細片が出土しており、当該時期のいずれかに属する遺構と考えられる。I-B区では近、現代の杭列の他は、顕著な遺構は確認できなかった。

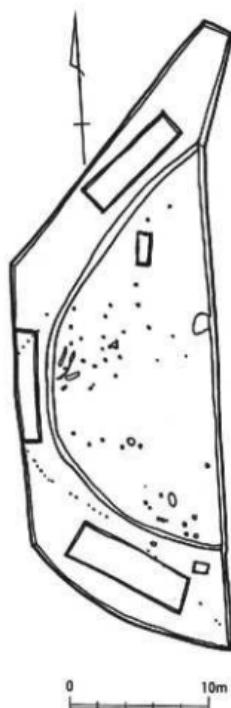


fig.28-38. I区平面図



fig.28-39. I区全景



fig.28-40. I-A区細部

II区

II区は、段丘上をII-A区、下段の旧流路部分をII-B区とした。

II-A区では柱穴、ピットを確認した。特に北端部では柱穴が比較的集中して検出されたため、調査区を一部拡張して精査を行ったが掘立柱建物としての単位は確認できなかった。

柱穴の埋土内からは遺物は出土しなかったが、上層にあった遺物包含層からみて、平安～鎌倉時代の遺構である可能性が強い。

II-B区では、溝状遺構S D01と集石遺構S X01が検出された。

S D01

検出長8.8m、幅0.8m、深さ0.1mの溝で、調査範囲外に延びる。埋土からは平安～鎌倉時代の土器の細片が出土している。

S X01

II-B区北端に位置し、長野川旧流路の肩部～斜面にかけてを盛土によってやや平らな面を造り出し、その部分に河原石を敷いている。また平坦面の終わる部分には丸太材を横におき、土止めとしている。周辺からは平安時代末期の須恵器、土師器等が出土した。

遺構の検出状況から推定して、水汲み場、水洗場等の施設と考えられる。

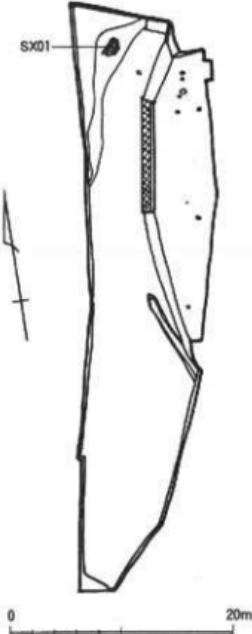


fig. 28-41. II区平面図



fig. 28-42. II-A区検出状況



fig. 28-43. S X01

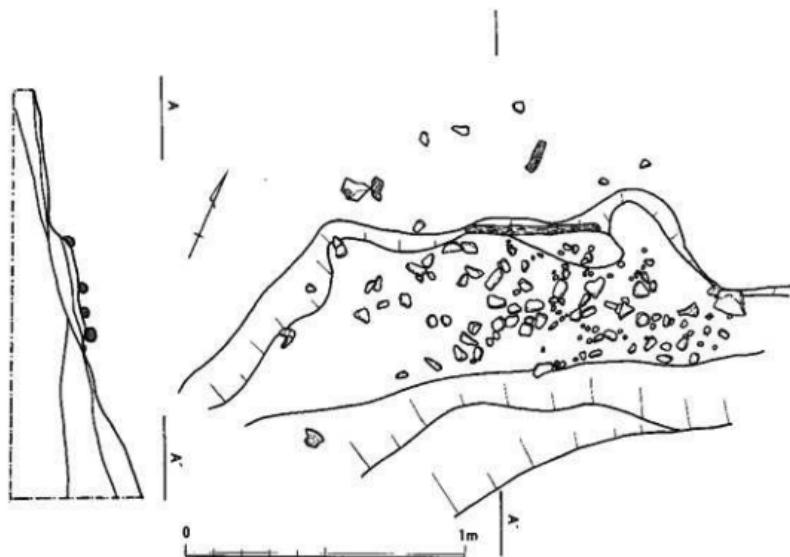


fig.28-44. II区 S X 01平面・断面図

### III区

III区は、段丘上をIII-A区、下段の旧流路部分をIII-B区とした。

III-A区ではピットを確認したが大半の遺構は削平を受けており、深さ0.1m程度しか残存していない。

III-B区では、長野川の旧流路の一部および橋梁的な性格を持つ構造物S X 02を検出した。

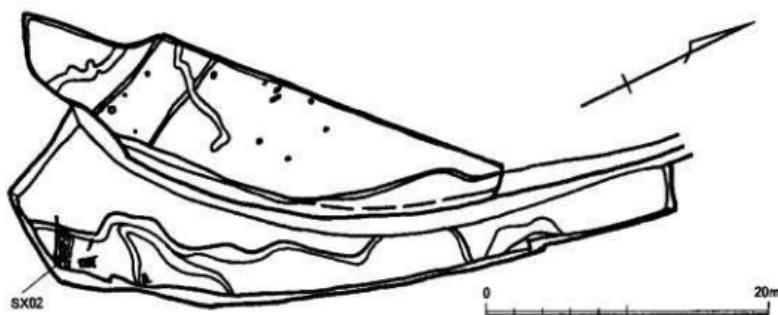


fig.28-45. III区平面図



fig. 28-46.  
III区全景

S X02

全長約3.5m、幅約2mで、丸太材と板材を組み合わせた遺構である。板材は厚さ1cm程度で、残存長の平均は約2.5mである。北西側は、ある時期の流路の肩部と思われる部分に接した形で置かれている。南東側の端部は四角く切りそろえている。下に敷かれた丸太材は、直径0.1~0.2mであり、板材と直交して3本、平行して1本確認された。

この様な形状からすれば橋梁的な性格を持つものと考えられるが、以下の様に、いくつかの疑問点を有している。

1. 出土状況を詳細に観察したが、釘や綱等で板材と丸太材を結合した痕跡は確認できなかった。
2. 丸太材は、自然木の枝を払っただけであり、何らの加工も施していない。また、まっすぐな材を使用しておらず、板材を安定させることは困難である。さらに橋脚と推定される部材が、調査範囲内では確認できなかった。

以上のようにいくつかの問題点は含んでいるが、S X02は橋梁的な性格を持つ構造物、ないしは、水汲み場、水洗場等の水際ヘアプローチする施設という推測がなされる。今後、類例等を詳しく検討する必要がある。

時期については、S X02付近からは遺物が出土していないので明確でないが5mほど離れた同一層位から、平安時代末期の土器が出土している。

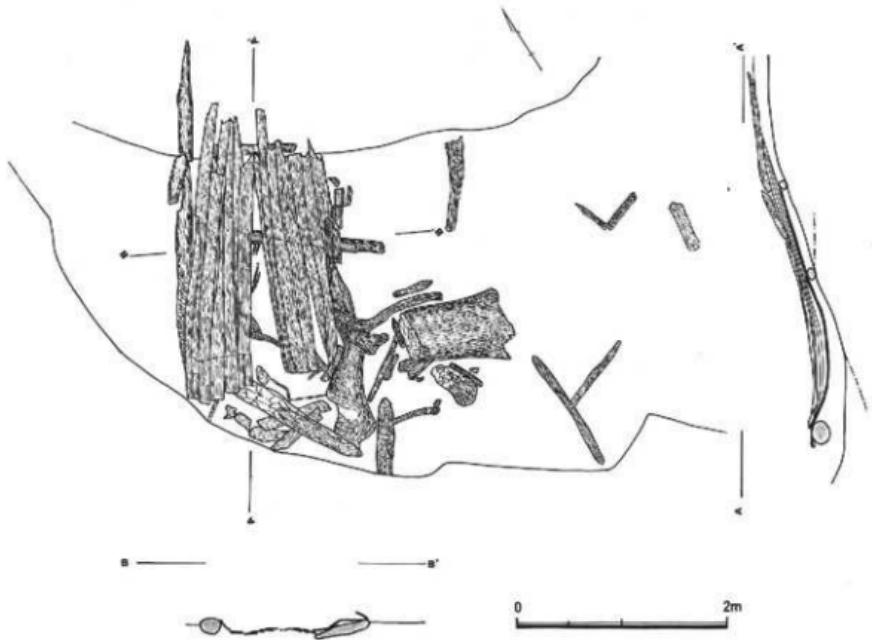


fig.28-47. S X02平面·断面图



fig. 28-48.  
S X02

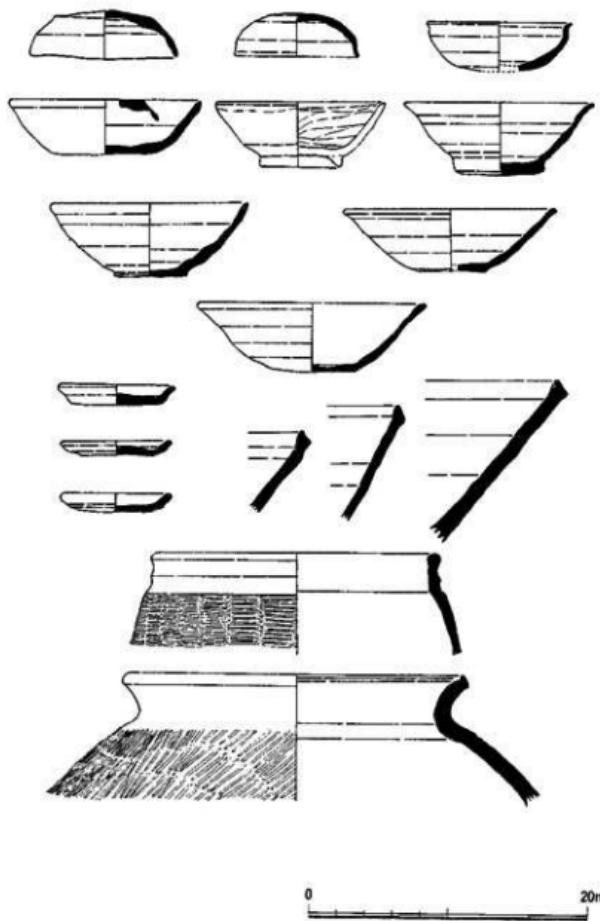


fig.28-49. 遺物実測図

## 2.まとめ

今回の調査で判明したことは、以下のとおりである。

- (1) 段丘上で平安～中世のピット等が確認されたことにより、周辺の地域に当該時期の生活空間の存在が確認されたこと。
- (2) 長野川の旧流路付近から S X01、S X02という橋梁あるいは水際ヘアプローチする施設が確認されたこと。特に S X02は構造が特異であり、今後その性格を充分検討する必要があること。

## 29. 定塚1号墳

### 1. はじめに

定塚墳丘墓群は北神中央線の路線敷予定地内を分布調査した結果、発見された墳丘墓群である。今まで、11ヵ所の墳丘状隆起が確認されている。昭和60年度に試掘調査を行った結果、丘陵頂部で土器片が発見された。昭和61年度に丘陵尾根南部について本調査を実施し、丘陵最頂部から南西に続く尾根端に方形墳1基（1号墳）、丘陵最頂部に方形墳1基（2号墳）を確認した。以上の調査結果に基づいて、教育委員会と土木局との間で、取り扱いについて協議を行った。協議の結果、2号墳については設計変更により現状保存とし、1号墳については道路設計上変更は困難という結論に達し、1号墳は記録保存することになった。このため、主体部墓坑内の内部精査、墳丘築成状況の確認を目的として再度調査することとなった。

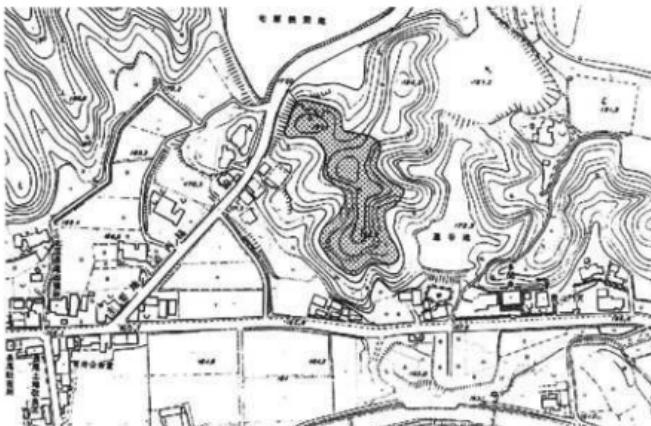


fig. 29-1.  
調査位置図



fig. 29-2.  
調査前全景